

案山子
二〇二一 夏

新潟大学文芸部

目次

目次

目次	3
お題作品『毒』	7
お題作品『毒』	7
地獄花 /大豆食品	
地獄花 /大豆食品	11
スノードロップ /ひるかわこう	
スノードロップ /ひるかわこう	19
あの子、私より馬鹿だから。/星月よる	
あの子、私より馬鹿だから。/星月よる	33
エチュード I /奥村匡将	
エチュード I /奥村匡将	43
泉 /鵜飼峰々子	
泉 /鵜飼峰々子	49
通常作品	
通常作品	59
飢えと錯覚 /八崎線	
飢えと錯覚 /八崎線	63
エチュード II /奥村匡将	
エチュード II /奥村匡将	77
タートルネックさん /笠原ざわ	
タートルネックさん /笠原ざわ	89
夢か現か幻か /佐久間佳雪	
夢か現か幻か /佐久間佳雪	97
都市の帰結 /汐咲ひかり	

都市の帰結 /汐咲ひかり	105
奥付	
奥付	111

目次

目次

目次

○ お題作品『毒』

スノードロップ ひるかわこう
あの子、私より馬鹿だから。 星月よる

ポートフォリオ 小原光将

○ 通常作品

エチュードⅡ 奥村匡将
タートルネックさん 笠原ざわ

お題作品『毒』

お題作品『毒』

お題作品『毒』

地獄花 / 大豆食品

地獄花 /大豆食品

地獄花

まだ五月も終わったばかりだと言うのに早くも蒸し暑さを感じる体育館。そこに私たちには詰め込まれて綺麗に並べられていた。ステージの上にはわざわざ今日のために呼んだ講師らしい人が熱く語っているがどうやら生徒にはあまり響いていないようだった。

私はこういった自分の進路を考える授業が嫌いだった。先生は口々に「自分の進みたい道を選べ」とか言うくせにこんな大人が話したいだけの話を私たちに聞かせてくる。授業の後に何かしらの感想を求めてくるのもめんどくさい。興味のない話を高々一時間聞いていただけでその後の人生に影響は出るのか。この中の何人の人が一週間後、今日の話を覚えているのか。甚だ疑問である。

そして何より進路を考える必要のない私にとってこの時間はただただ退屈で、やっぱりこんな授業は嫌いだと思った。

*

木曜日の朝、ベッドの上で目覚めた時気分は最悪だった。突如として体が虫になっていたからとかそんな理由ではない。可笑しな夢を見たからだ。外国のコース料理なんかを出す高そうなお店で何も乗っていない皿と椅子に座ってそれに向き合う私。初めは何もせずにぼんやりしていたがだんだん気分が悪くなって吐き気が襲ってくる。最後はもう耐えれなくなって胃からせり上がりてくるものを吐き出した。喉と鼻が胃酸のせいで痛む中視線を向ければそれは「歯」だった。私は確かに夢の中で白い歯を吐いた。不快感で言ったら虫に変身するのと変わりないがとにかく気分は最悪だった。夢とは一つ一つに意味があるといつかテレビで言っていたが怖くて調べなかつた。

「今週の土日もお店手伝ってね」

「いいけど午前中は部活あるから午後だけだよ」

最悪な気分のまま食パンを齧っていると卵焼きを焼いている母がいつもの頼み事をする。聞かれなくても人手が足りないのはわかるから手伝うのに。律儀な性格だと思う。反対に口数の少ない父から頼み事をされたのなんてほとんどない。今だって新聞を読んだ

まま何も話さなかった。お客様との関係が大事な仕事なのに無口だなんて損していると思う。

私の家は家族で理容院、いわゆる床屋をしている。安さと庶民感溢れる田舎の店だ。来る客も街の人ばかりだが意外とその年齢層は広い。そこで私がする手伝いは実際にハサミを握ることでは無い。殆どがレジとか片付けとかの雑用だ。普段は母がやる仕事だが、休日になって人が増えると私が母の代わりにやる。それで母は父の横に並んで店に来たお客様の髪を切る。中学校から時々手伝いするようになって高校に入ればほぼ毎週していた。来た人は私に「偉いね」とか「頑張ってるね」とか声をかけてくれる。この仕事は嫌いじゃなかった。

「……十年ね」

私の弁当箱に卵焼きを詰めながら母はそうつぶやく。一気に現実に引き戻された気がした。

「今年は何か特別なことするの？」

もしかしたら母の独り言だってかもしれない。それでも何だかこのまま母の言葉を流すのも気が引けた。父は返事をしなかった。

「十回忌っていうのはないけど……そうね、毎年同じなのも申し訳ないし今年はちょっと別のことしましょうか」

せっせと私のお弁当を作る母の横顔をうかがえば母が柔らかく目を細めているのがわかった。何だか久しぶりに母の顔をきちんと見た気がする。私の記憶の中の母よりほんの少し皺が多かった。食パンの最後のひと口を牛乳で流し込んでいつもより早足で部屋に戻る。何かよく分からぬものが早く部屋に戻ろうと、ひとりになろうと私の気持ちを急かした。

私は気づいている。店の手伝いをする私に声をかける人達の目の奥に懐かしさが滲んでいることを。別人の姿を私に重ねていることを。それが誰なのかも私は知っている。私よりも十年も先に生まれて私が八歳の時に死んだ人。

私には年の離れた姉がいた。だがもうその人はこの世に居ない。

*

専門学校の入学を目前に姉は死んだ。綺麗な人で頭も良かった。近くのコンビニに歩いて行く途中、信号を無視して突っ込んできた車に跳ねられ死んだ。葬式の日に見た四角いフレームの中で微笑む姉はやはり綺麗だった。姉は事故死だったにもかかわらず損傷はほぼなかったため棺の蓋は開けられた。でも、肝心の姉がどんな様子だったかは正直に言うとよく覚えていない。生氣の無い、死んだ人間特有の白い肌が棺を覗いた時に見えたのは覚えている。人と話すのが苦手で、でも頑張ってお客様と話してよく顔を真っ赤にしていた姿はそこにはなくてやるせなかった。葬式の帰り道、遠くのあぜ道に真っ赤な花が大量に咲いているのが見えた。姉から抜け落ちた赤が土に染み込んで、それを根から吸い上げたようなそんな色だった。確かあの花は——。

*

「暇そだからって雑用任されて大変だね」

「本当にね。体育祭委員に任せろよって感じ」

職員室から出てきた友達に声をかける。彼女は大袈裟に溜息を吐いて何だか可笑しかった。笑うとえくぼができる彼女は身振り手振りが大きい。三年生になって初めて仲良くなった子だけどもっと早くから話していたかったと思う。

「体育祭のためにクラスで沢山タオル使うんだって。いらないタオルとか十枚くらい欲しいからクラスに声掛けろって……」

「十枚くらいならありそうだけど持ってこよっか？ 家が床屋でさ、ボロ布結構余ってるよ」

一瞬キヨトンとした後彼女はすぐに「そう言うことならお願ひしたい！ ていうかさせて、させてください！」と迫ってくる。勢いが凄くてこれもまた可笑しかった。口角が上がりそうになるのを耐えながら返事をする。

「いいよ、明日持ってくるね」

私よりも拳一つ分低い位置にある丸くて大きな目と目が合った。運動部らしい少し焼けた肌と相まってリスのような女の子だと思った。

「私知らなかっただけでお家床屋さんだったんだね！ 手先器用だもん、ピッタリだ」

無邪気に笑う彼女に「ありがとう」と返せばはにかんで「どういたしまして」とまた笑った。

*

気づいたら教室に一人で立っていた。帰ろうと思っても足が動かず試しに頬を抓つてみたら痛くなかった。これが夢であることを知る。しばらくぼんやりと立ち尽くしてたら足元で「グワッ」と鳴き声がした。見るとそこには白いアヒルが一匹、目が合うとまるで挨拶するかのようにまた「グワッ」と鳴いた。アヒルはそのまま私から離れて窓の方に行く。最後にまた「グワッ」と鳴いて開いている窓から飛んでいってしまった。終始リアクションに困るシュールな夢だった。

はっと目が覚めて寝落ちしていたことに気づく。時計を見たらほぼ真夜中を指す時間だった。随分変な夢を見ていた気がするが起きた時にはその内容は覚えていなかった。残念なことに私はまだお風呂に入っていない。早く入らないと思う反面、私は風呂とは違う別の場所に向かった。

久しぶりに姉の部屋に入る。部屋は姉が使っていた状態のまま残されていたが母が掃除してるので埃っぽさはなかった。

椅子に座って部屋を見回す。姉の部屋の本棚には雑誌とか理容師になるための本とか教科書とかが綺麗に整理されていた。その中から何かの参考書を手に取ってペラペラとめくってみれば、姉がしっかりと勉強していたのがよくわかった。姉は頭の良い人だった。九九も言えない私に姉は色々なことを教えてくれた。

姉の部屋に来た理由を思い出してもう一度部屋を見回すが目当てのものはなかった。それならクローゼットかとスライド式の扉に手を伸ばす。開けてみるとそこにはカラーボックスとダンボールがひとつ置いてあった。その上にハンガーを使って服が何着か掛かっている。少し悩んでからダンボールをクローゼットから引っ張って来て明るいところに出した。もう居ないとはいっても、人の部屋に入って荷物を漁るのはどこか申し訳ない。どうかここに入っていてくれと半ば祈るような気持ちでダンボールを開ける。私の祈りが通じたのか幸運にも探し物はそこにあった。懐かしさが込み上げてくるのを感じながら私は中から表紙に紫陽花が映った一冊の本を手に取った。

姉は色々なことを教えてくれたがそのひとつが植物の事だった。私があの花は何だと聞けば名前を教えてくれる。もしも姉が名前を知らない花だったらこの本を使った。大きさは普通の図鑑より二回りくらい小さいが、写真がたくさん載っている。あの花は何だろう、これかな、こっちかも、と二人で本を覗き込む時間が好きだった。ページをめくつていけば昔を思い出して胸がいっぱいになる。それでも私が手を止めることはなかった。私が姉の部屋に来た理由、それは葬式の日に見たあの真っ赤な花が何か調べるためだった。十年も経って今更、と思う自分もいる。なぜ今までしなかったのかとさえ思う。脳を過ぎるのは今日のどこかリスに似た友達から言われた言葉だ。彼女は私が理容師になることを疑わなかったし、事実私は理容師になってここで働くのだろう。当然だ、長く続いてきた店の歴史を終わらせる気は無い。最適だとまで言ってくれた彼女の言葉は嬉しかった。でもあの時、じゃあ私の姉の死って何だったんだろう、そんな言葉が口から出そうになってゾッとした。姉は理容師を目指すその途中で呆気なく死んだ。残された私は今、姉が歩むはずだった理容師への道をただ漠然と進んでいる。それがまるで姉の将来を私が奪ってしまったようずっと苦しかった。だから姉の死に理由、または意味が欲しかった。私が姉の未来を奪ったんじゃない、もっと別に死ぬ必要があったから死んだ、そう思いたかった。あの子は別に悪くない。これは私の気持ちの問題だ。あの赤い花が何か分かれば姉の死の意味も分かる気がした。ダリア、バラ、サルビア、ハイビスカス、まるで昔姉と二人でやったことをなぞるように今度は一人で赤い秋の花を探した。必死にページをめくつついにその花を見つける。これだ、と思った。あの日見た姉の色を吸い上げたような赤色。そんな地獄のような色をした花、彼岸花がそこにはあった。

「お姉ちゃんの部屋で何やってるの」

「びっくりした……」

振り返ればそこには廊下から部屋を覗く母が居た。驚いて持っていた本を落としそうになる。

「あと風呂入ってないのあんただけだから早く入ってね」

「あー……わかった。すぐ入る」

母が居なくなったのを確認してからもう一度本に目を落とす。そこには変わらずに咲く赤い花があった。

*

お湯に浸かって目を閉じる。

結論から言うとあの本に姉の死の意味なんて書いていなかった。当たり前だ。私はただの植物の本に何を求めていたんだ。馬鹿らしい。そうするといよいよ大変なことになってきた。私は何から姉の死の意味を知ればいい？ 十年考えて、思い出の本まで使って結局分からなかった。限界だった。目を閉じたまま少しづつ沈んでいってお湯が鼻辺りに来たところで突如思いつく。姉の死の意味が分からぬなら私が作ればいいんだ。目を開けば水面に明かりが反射して眩しかった。

姉は死んで彼岸花になった。彼岸花には球根に毒がある。その毒で私を殺す。きっとそれが姉の死の意味だ。私が考えた姉の死の理由だ。良かった、私が姉の未来を奪ったんじゃない。そう思えば私は救われる。

それにもしても、と考える。毒が全身を回りきるのはいつになるのか。何十年後かもしれないし明日かもしれない。欲を言えばできるだけ早く殺して欲しい、そう思った。彼岸花の写真を見たことでようやく鮮明に思い出せた。姉の行儀よく閉じられた目と血色を失った白い肌、その肌に濃い影を落とすまつ毛に小さく可愛らしい鼻と口たち。とにかく今は、今だけは色の抜け落ちた物言わぬ姉の顔とあの日見た地獄のような赤い色が瞼にこびりついて仕方なかった。

スノードロップ / ひるかわこう

スノードロップ /ひるかわこう

スノードロップ

ひるかわこう

私たちが付き合い始めてすぐの五月一日に、ソウくんは、私に一輪のスズランを差し出した。

「……スズラン？ なんで？」

私の誕生日はまだまだ先だし、何の記念日でもない。記憶力に全く自信のない私は、どんなに些細なものでも全ての記念日をカレンダーにつけたから間違いない。

疑問符が頭の中を埋め尽くして、受け取ろうとした手が宙ぶらりんになった。その様子に彼は照れくささを思い出したように頬を赤く染めた。

「今日は、その……愛する人にスズランを送る日なんだ。日本じゃなくて、フランスの習慣なんだけどね」

「愛する人……」

そう繰り返せば、彼の顔はさらに真っ赤に染まる。顔を背けたことで見えた耳まで真っ赤だ。

愛する人。愛する人。何回も口の中で転がして、ゆっくり飲み込むと、胸がポカポカする。純粋な幸福の熱だった。

「へえ～なかなか粋なことするじゃん。愛してるんだ私のこと？ ふふふ」

それでも全身がむず痒くって堪らないから、茶化した。彼は少しだけむくれて言う。

「はいはい、そうですけど！ そういうそっちはどうなのさ！」

もう自棄になった彼はそう叫んでこちらに目線を向ける。

今、相当恥ずかしいことを言っているけれど、分かっているんだろうか。後から思い出してきっと後悔するに違いない。

「私も。ふふふ」

それでも確かに嬉しくて、幸せで、私はそう返す。スズランを受け取れば、ふわりと爽やかに香った。

少し頭をもたげてこちらをのぞき込むそれがとても愛おしくて、優しく、壊れ物を扱うように掌で包む。萎びてしまわないように涼しくしていたのだろう。茎の表面をひやりとした冷気が覆っていたが、すぐにそれは掌の中で溶けて消えていった。

「……うん。かわいいね。これ、どうしよう？ せっかくだからどこかに飾りたいな。…それこそ、こことか」

そう言って私と彼の間にそれを差し出す。確かに一輪挿しがどっかの物置の中にあったはず、それに入れて——

「ええと、食卓は、駄目、かな」

うきうきとした私の言葉の中に、妙にこわばって固い彼の言葉が割り込む。彼はやや眉を寄せ、口元をもごもごとさせて、歯切れ悪く、つづけた。

「玄関とかが、いいんじゃないかな」

そう言って、ね？ とぎこちなくはにかむ彼はどう見ても不自然で、本来なら理由を問うべきだったのだろうけれど、手の中の白の香りと幸せに酔ってしまった私は、まあいいか、とさして気にすることはなかった。余計な波風は立てたくない。

「ん。じゃあそうしようか。一輪挿し、探してくるね」

すっかり温まった緑を私はテーブルに横たわらせて、隣の部屋にある押入れの濁った金色の窓みに手を掛け、右に引いた。

ひやりとした。

・ * · * · * ·

ブーッ、ブーッ、と地を揺らす不愉快な音で目が覚める。止めないと止まらないそれに苛立つ気持ちを込めてスマホを手に取って右にスワイプ。おとなしくなったそれを左隣のクッションへ投げると、ぼすん、と間抜けた音とともにそれは超微細ビーズの海に沈み込んだ。

そこまでやって、溜息を吐いた。スマホに当たっても、どうしようもない。けたたましく鳴って朝を告げるのはあれの仕事だし、そもそもそれを命じたのは私。原因は私にあるし、私次第でどうにでもなる。思い通りに、なる。

人生も他人もそうだったらよかったのに。

五月六日。世間では待ち焦がれたゴールデンウイークが終わって、社会が動き出す日。いつもより億劫な片道だけど、その胸には楽しかった思い出が一杯に詰まっている。もちろん私だって、そのはずだった。

デスクの上に積まれた旅行雑誌を一瞥して、やるせなさに襲われた。見たくない、リビングへ向かう。そうしたって逃れられることはないし、むしろ傷口を抉るだけなのだけれど。

「おはよう」

それは誰に届くこともなくフローリングに転がった。静寂の痛みが、床の冷たさが、足の裏、皮膚の表面からじわじわと私を侵す。このままだと抱えたものも凍り付いてしまいそうで、それを拒むように無理やり口を動かして、吐き出した。

「どうして出て行ったの」

応答はない。

当たり前だ。この部屋で私の声に唯一答えてくれた彼はもうここにはいないのだから。出会ってから四年とちょっと、二人で幸せに暮らしてきた日々は数日前に唐突に終わりを告げた。少し前に学生が一人辞めたために夜のシフトが多くなって、しばらく一緒に

夕飯を食べるどころかろくに顔を合わせて話すことも出来ていなかった日々の中で、珍しく昼シフトのみで仕事が終わった日のことだった。喜ぶ私と対照的に、その日の彼は私と目を合わせず、ずっと口をもごもごしていた。それでもいつも通り私がパート先であったことの話をして、まだ彼は静かにしているので、場を和ませたくて、最近ちょっとうっかりしている話をした。洋服を掛けた場所を勘違いすることが増えたこととか、小物、特に名刺とかレシートとかを失くすことが増えたこととか。おっちょこちょいでやばいよね、それもこれも夜勤のせいだ、なんて言ったら彼は俯いて何か呟いた気がした。どうにも気になって、「何か言った?」と覗き込んだら、彼は突然こう告げたのだ。

「僕、ここにはいられない」

茫然としたまま何も言えない私を置いて、彼はそれだけ言ってこの部屋を出て行った。苦々しく歪められた表情は、今までに見たことの無いものだった。事態を把握した頃には、電話をしてもメッセージを送っても、彼は答えてくれなかった。そのまま時が経つて、これが現実だと、飲み込まざるを得なくなつた。

独りってこんなに寂しかったか、と自問する。二人暮らし用の賃貸は、当たり前ではあるけれど一人で暮らすには広すぎた。いや、それより、何もかもが二人分で、それが心を抉る。家具も、食器も、あれも、これも、思い出も、においも、二人分。まだこの部屋には彼がいる。この部屋の何もかもが二人分であるうちは、彼はいつまでもここにいる。

だから全て片付けてしまおうと決意した。女の恋は上書き保存。上書き出来るか分からぬから消してしまおう。

トースターで一枚だけ食パンを焼いて、一つだけスープカップを用意して、二〇〇ミリリットルだけお湯を沸かし……たかたけど最低でも三〇〇ミリリットルは沸かさねばならないようだ。仕方ないからそれだけ沸かして、粉末スープに注いだ。もちろん一袋だ。余った分は食後のコーヒー一杯分に丁度良い。毎朝二十三に設定していたテレビの音量は、今日は十五で十分だった。

・ * · * · * ·

独りなのをいいことに、寝間着のまま作業することにする。何もかも捨ててしまいたい気分に地方自治体は味方して、明日は燃えるゴミの日、明後日は粗大ごみの日だった。

とにかく断ち切る、忘れる一心でまずは大物を退かしにかかる。食事用の椅子を解体しようとして、工具を中学校の技術の授業以来持っていないことに気が付いた。大人しく諦めてそのまま押入れの奥底にしまった。テーブルは一人分にはやや広いが、こればかりはどうしようもない。そのままキッチンの奥、食器棚に目を移す。彼は元々服とかは少ない性質だったしそういう私物はいつの間にか纏めてあってそのまま持ち出していったから、小物はほとんど残されていない。しかし彼は食器をそのまま置いて行った。つまり実家に帰るか他にあてがあるということだが、彼が実家を出て長く経っている今、おそらく実家に彼の入る場所は無い。つまり。そこまで考えて舌打ちをする。ああくそ、知ってたよ。急に別れを告げる理由なんてそれしかない。そうなると、彼にとっては急でも何でもないのだろう。ずっと前から私のことを騙していたんだ。帰りが遅いから心

配だ、会えなくて寂しいだとか、スズランを差し出して愛しているだとか言って。

そこまで考えて、自嘲した。結局私はまだ彼のことを諦めることができていない。本気で諦めようだなんて思ってもいない。突然のショックから逃げようとして、それこそ防衛本能のように勢いで彼という存在を抹消しようとしただけだ。全部怒りに変換して復讐してやろう、と思えるパワーもない。すっかり幸せに頭まで浸かって、平和ボケしちゃった。そう、そもそも本当に存在を抹消したいならまずは彼の象徴ともいえるスズランから片付ければよかったのだ。

ふらりと玄関へと向かい、硝子でも扱うかのように優しく丁寧に持ち上げる。ぐしゃりと握り潰せばそれで終わりだけれど、それで潰れるのは私な気がした。少しの音もたてないように、禁じられた食卓に置けば、焦げ茶色に可憐な白がよく映えた。それが単に綺麗だったからか、彼への少しの反抗ができたのが嬉しかったのか、少しだけ慰められた。

愛してる、の意味を込めて贈られる美しい花。どうして、食卓に置いてはいけなかつたのだろう。彼が駄目というならそうなのだろうと何も考えずに従ってきたから、その理由は結局分からずじまいだった。

この子が枯れたら今度こそ終わり。本当に何もなくなってしまうから。そう見切りをつけたところで私の頭に浮かんだのは、水を替えなければならぬということだった。試行錯誤の末毎年彼のくれる切り花の寿命は延びている。去年は九日だったから、きっと今年は十日を超えるはずだ。それに安堵して呆れて、私は立ち上がる。一輪挿しを手に、少し隔てられた壁の向こうのキッチンへと向かう。ややカウンターのようになっていて、部屋を選ぶ際のちょっとしたこだわりになったところだった。そこに一輪挿しを置いて、私だけ回り込む。再びカウンターからそれを持ち上げて、花を抜いて横たわらせた。手の中にある器から水を捨てようとして、手を止める。一つの濁りもない透明を、向こうのリビングから差し込む光が通り抜けて、明かりのないキッチンに光の斑を映した。

それがなんだかひどく綺麗で、私と彼の思い出の欠片のようにも見えて、無性に近づきたくなつて、私はそれを下に傾けるのではなく、持ち上げながら、私のほうに傾ける。滑らかに切り取られた角がなんの抵抗もなく下唇に触れる。シンク内に描かれていた斑模様は、気づけば私の心臓の位置に落とされている。

いつしか見ている景色が乱反射していることを認識して、私の目は覚めた。口の端から首筋へ滴が這うのを感じる。一泊遅れて、鼻に青臭さが抜けた。切り花のにおいとしか言えないそれだった。決して気分のいいとは言えないそれに自然と眉を寄せ、舌を出した。

飲んだ。今私、この器の中の水を飲んだ。

何をやっているんだろう。彼がいなくなるだけでこのざまだった。どこかおかしくなつてしまつたのかもしれない。不思議とそのことに関しての絶望感はなかった。おかしくなつてしまえるならそれでもよかった。伝う滴を拭おうとしてカウンター右上のハンドタオルに手を伸ばしたら、スズランが私を覗き込んでいた。ひどく弱って見えた。お揃い、と呟いて、花瓶を洗い水をためて挿した。

何をするでもなく、動く気にもなれず、ただ口の中で青臭さだけを暫く転がしていると、ピコーン、という控えめでくぐもった音が聞こえた。少し考えて、投げ捨てたスマホだ

と気付く。重い腰を上げて3時間ぶりの寝室に入りスマホを手に取れば、今まで気が付かなかっただけでかなりの数の連絡が入っていて少し引いた。全て同一の人物からだった。『雪野しづく』。私と彼の大学時代の同級生で、学部は違えど部活が同じだったので、頻繁に関わっていた。大学時代を振り返ると、この子と一緒にいた時間が一番長かったかもしれない。明るくて天真爛漫で、そのくせ人の言えない気持ちを見抜くのに長けていた。秘めた気持ちをいとも簡単に暴いては、分かりやすく噛み砕いて見せた。そのせいで悩み相談をする人が絶えなくて、まるでカウンセラーのような役回りに追われていた。ただ本人はそれを割と楽しんでいたようで、今ではスクールカウンセラーをやっている。卒業後に色々な人の進路を聞かされたけど、この子以上に納得できる行先のものはいなかった。

見れば『今日のランチのことなんだけど』『もしかして忙しいのかな？ 見たら連絡ちょうどいね』『本当に大丈夫？ 生きてる？』といったようにだんだんあっちが不安になってきていることが伺えるメッセージが直近一時間のうちにずらっと十八件、それに加えて電話が二件入っていた。通知欄を下までスクロールすれば、カレンダーの通知も来ていた。そういうえば、と数日前にした彼女との約束を思い出す。片付けに熱中していて、というかそれどころではなくてすっかり忘れていたことに申し訳なさが募ったが、同時に気づかない今までいればよかったとも思った。正直なところ、この状況では会いたくない。いつかは会って話さなければならぬが、そうすればあの子を傷つけかねないし、何より顔向けできない。

それでも一人でいたくない気持ちが勝った私は、メッセージアプリを立ち上げて『ごめん！ 忘れてた！ ちょっと部屋片づけてて。今から急いで準備するね。間に合うようには頑張る。どこ行けばいい？』とだけ返信する。一分も経たないうちに返信が来た。ちょうど私の家と彼女の家の間にある、よく分からぬオブジェの前で待ち合わせのことだ。もう三〇分しかない。私は大急ぎで身支度を整え、最低限のベースメイクだけ済ませる。

「行ってきます」

食卓の上、私の席の向かい側の花に声をかけた。

・ * · * · *

よく分からぬオブジェというのは『LOVE』というアルファベットをかたどった螢光色のものである。何がLOVEだと悪態をつきたくなるがぐっとこらえる。だれが何のために作ったのかは知らないが、芸術に罪はない。……芸術なのだろうか、これは、と言えば彼女はけられると、そんなの受け取り手次第だ、と笑った。なんて雑な、と思ったが一理あったので何も言わないでおくことにした。

目的の店は表通りを歩いて四分のおしゃれなカフェだった。確か三週間前に新規オープンしたばかりだったはずだ。店名が読めない——む、むーぐえっと？ マーガレット？

違うか。読めなくて困ることもなさそうなので帰ってから調べることにする。やっと意識を目の前に戻せば、歩くのが早いはずの彼女は、私の歩幅に合わせてゆっくりと歩いてくれていた。

ランチタイムにもかかわらず、スムーズに席に案内される。カフェ特有のメニューの少なさと分かりづらさに辟易していると、彼女はランチセットを頼むというからそれに倣うこととした。店員が去っていくと、彼女は両肘をテーブルに乗せ、こちらに身を乗り出してきた。

「……ねえ、時子、なんかあった？」

そこにいたのは同級生のしづくちゃんではなく、カウンセラーのしづく先生だった。自分では頑張って元気をしているつもりだったけれど、先生にはそんなことお見通しなのだろう。むしろ、無理していることまで含めて心配しているのだ。

そして私にとって、そんな子ども扱いはひどく腹立たしいものだった。

「しづく先生には言いたくない」

そう言えば、彼女は一瞬きょとんとして、ふはっと吹き出した。器用に声を殺してけられると笑う。

「そうかそうか！　それはごめんなさい！　でも様子はおかしいし、だいたい時子が予定を忘れることがなんて無いのになあ。しかしちゃ先生って、言いたいことは分かるけどね！　仕事のことを思い出すから勘弁してほしいね」

「天職だって言ってたじゃん。というか仕掛けてきたのはそっちだし」

「長くやっているといろいろあるものなのだ」

そう言ってしづくは腕を伸ばして前屈し、机に突っ伏した。

「こら。外だよ、はしたない」

「なんか時子のほうが先生みたいだなあ」

同級生のしづくちゃんだ。私は心から安堵して、同時に心が痛んだ。

しづくは言わば、私とソウくんをつないでくれたキューピットだった。同窓会の際に、彼女と同じ学部の子だということで、ろくに関わりのなかった彼と私は偶然知り合ったのだった。友達の友達といった関係からのスタートだった。ソウくんとの幸せは彼女がいなければ得られなかつた。だから彼女には心から感謝していたし、最近どう？などと聞かれれば正直に話すようにしていた。困ったときに相談すると、彼女は本気で心配してくれて、丁寧に一緒に考えてくれた。大方ソウくんも同じだろう。そんな面倒くさい立場だったのに、楽しかった話や、幸せな話を聞かせると我が事のように喜んでくれた。本当にいい子だ。

だからこそ今の状況は、私とソウくんを繋いでくれた同級生のしづくちゃんに正直に話さなくちゃならない。彼女にそれを聞かせるのは本当に申し訳ないし、心苦しい。でも、黙っているわけにはいかなかつた。

「あのね、実は……」

ぐらりと頭が揺れる。まるで漫画のように冷汗が出てきて、つうと背中を伝う。呼吸が浅くなっていく。気づけば心臓が異常な速さで拍動している。怖い。……何が？私は今、何を恐れているのだろう。頭が回らなくなってきた。一度深呼吸をして落ち着こう。肺まで到達していない息を何とか無理やり肺の真ん中ほどまで押し込めたような気になって、

うえ、とえづいた。猛烈な吐き気に襲われる。頭が働かない、地面が定まらない、気持ち悪い、苦しい、おかしい。

「ちょっ——時子！ どうしたの」

「……え」

声が出ない。出せない。今口を開いて体内から何かを出そうとすれば確実に吐く。頭の揺れが大きくなる。何かが打ち付けたようにがんがんと響く。視界が歪む。何が起きているの。

しづくが必死に叫んでいて、料理を運んできた店員さんだろうか、が駆けつけてくる。それを最後に、私の意識は途絶えた。

・ * * * *

目を開けたら、無機質な白が広がっていた。

起き上がろうとして、腕にチューブが繋がっていることに気づく。消毒液のような、よく分からぬ匂いが充満している。口元には呼吸器のようなものが付けられていた。

ピロリロリロ、という音が高く軽快に鳴った。見ればしづくがナースコールを押していた。すぐさま駆けつける看護師たちにてきぱきと説明をして、彼女はするりと部屋から出て行った。

「今原さん、ああ、起き上がらないで。自分が誰だかわかりますか——」

医者に説明されたことによると、どうやら私はあの猛烈な不調の後に倒れてここまで搬送されたらしい。詳しいことをあれこれ話されたがよく分からなかった。起きたばかりで頭が働いてないこちらの身にもなってほしい。

「——原因としては、植物毒の類かと。何か心当たりは？」

「植物、毒」

急に話を振られて意識を持ち上げる。

「ええ、そうです。先ほどご友人の方からお家にスズランがあると聞きましたが」

「えっ、ありますけど。もしかしてスズランって毒あるんですか」

急に馴染みのある単語が聞こえて思わず声を裏返すと、医者は神妙な顔をして言った。

「そうですよ。スズランには強力な毒があります。ざっくり言いますが、青酸カリの十五倍です」

「十五——」

可憐で美しかったあの花が、急に恐ろしく見えた。私と彼の、幸せの象徴が。

「それで、何か心当たりはありませんか？ 摂食しないと発症しないので」

接触？ 摂食。食べないと、ってことか。

「スズラン自体は食べてません。でも、花瓶の水を……」

「飲んだのですか」

はい、と頷けば医者がふう、と息をついて、少し目線を落としてなるほど、と言った。すぐに戻された目線は、おかしな人を見るそれだった。

「スズランの毒は水に差すことで抽出されます。危険な行為なので今後一切やめてくださいね」

医者と入れ替わりで入ってきたのはしづくだった。先ほどまで持ち運んでいた小ぶりの白のレザーバックに加え、黒色の縦長のトートバッグを携えた彼女は心配そうな顔をしていて、しかし間違いなく冷静だった。

「時子、大丈夫？　急に倒れたから、びっくりしたよ」

「う、うん。ちょっと悪いもの食べちゃったみたいでね、もう大丈夫。しづくこそ、ごめんね。迷惑かけちゃって。あとナースコール、ありがとう」

彼女は天真爛漫とは程遠い、美しい微笑みをこちらに向けて椅子に掛ける。目の前で友人が倒れた直後とは思えない落ち着きで、少し複雑な気分になった。

「あの場で私に出来そうなことはあれしか無かったから。そう、慌てて大きい声を出したりしてはいけない、ああいう場ではね」

ひやりとした。心を見透かされたようだった。

「そっか」

それきり病室は静寂に包まれた。命に関わるほどではなかったとは言え、まだ何となく苦しい私は進んで口を開かないから、静寂を破るとしたらしづくしかいないのだけど、彼女は彼女で私とは別のほうに意識を向けている。

チクタクと時計の針が動く音だけを聞いている時間がどれだけ流れたのだろうか。不意に、しづくが口を開いた。

「あのね、時子。私、時子が倒れた後、ソウに連絡したの。それでね、ソウから話したいことがあるって」

「やめて！」

私の突然の大声に、彼女は驚かなかった。ただ一瞬舌打ちの予備動作のように唇を歪ませて、すぐに表情を元に戻しただけだった。

「何があったのかは知っている、今じゃないのかもしれない。でもね、彼が今じゃないとって言って聞かないの。話しくいなら私でも」

「でもじゃないの、知らないでよ！」

しづくに当たったって仕方ないことは分かっている。それでもソウくんが彼女を通じて話そうとしてきたことが嫌だったし、彼女にも勝手に知らないでほしかった。先生じゃなくて友達に私の口から言わなくちゃならなかった。

「今はやめて、会いたくもないし話したくもない。あんな毒物を送り付けておいて。大体だったら直接会いに来なさいよ、人を介するんじゃないよ。とにかく嫌なの。話すことなんて何もない。捨てておいて」

息を荒げてそう言えば、彼女は少し困ったように眉を下げた。口元で微笑んでいて、全く笑っていなかった。知らない人のようだった。

「……そう、わかった。じゃあ、今はやめておく。私にでも、彼にでも、話せるようになったら、教えてほしい」

彼にもそう伝えてくる、少し一人になって考えたいでしょう？　と言って彼女は背もたれの無い丸椅子から立ち上がる。彼女が出口のドアに差し掛かって、椅子の座面の彼女の跡がほとんど消えたころ、そうだ、と言って彼女は振り返る。

「これ、預かったの。時子に伝えたいことを込めたのだって。話をするのは難しくても、もしちょっとでも落ち着いたら、開けてみてあげてくれないかな」

そう言って彼女は戻ってきてベッドのすぐ脇の机のような棚のようなスペースに黒いトートバッグを置いた。最後にこちらを覗き込むように目を合わせて、まるであやすように微笑んだ。それは間違いなくしづく先生の顔で、私は唇を噛んだ。そんな目で見ないでほしかった。さっき拒否したじゃん、私。

沸々と彼女への苛立ちが湧き上がってきたことに気づき、首を振る。あの子はいつも私のことを、私たちのことを考えてくれているのだから、こんな感情を抱いてはいけない。そう考えると途端に苛立ちが申し訳なさで埋め尽くされていく。彼女にはいつも間に立ってもらって、苦労を掛けてばかりだ。彼女に免じてせめて預かり物くらいは見てやろうと、バックの中に手を入れた。

最初に触れたのは、少しの水分と生氣を感じる薄っぺらい何か。続いてそこに別の何かがぶら下がっていることに気づく。細いもので繋がっていて、少し引っ張ったらぶつりと取れてしまった。それ自体も柔くて脆い。手を引いて、その手のひらにあるものを見た。

それは、小さな白だった。可憐で美しい白。

思わず、ひ、と息が漏れた。ポロリとそれを取り落とす。

——ありえない。

彼は、彼女は知らないのか、私がこうなった原因を。医者がどこまで話したかは知らないが、今の私にこれを贈って、いったい何を伝えたいというのか。悪趣味だ、と思わず口から零れた。何もかも疑わしかった。もうこの花に愛も希望も幸せも感じることが出来なかった。そう、きっとそんな意味で渡してきている訳ではない。こんな真っ黒のバッグに押し込めるのは愛の言葉なんかじゃない。

スマホに手を伸ばした。検索欄に『スズラン 花言葉』と打ち込む。一番上のサイトをクリック、スクロール。まるで今では嘘みたいに思えてしまった言葉たちの最後に、目が留まった。

『あなたの死を望みます』

不思議と、驚きも悲しみも出てこなかった。ただ、周りの文字列はもう目に入らなかつた。くつくつと、何の感情からきているのか分からぬ笑いが湧き上がってくる。ああ、そうか。そうなのか。

私はバッグの中身を引き出した。茎をぐしやりと握って、葉を曲げた。切りっぱなしだから、水には刺さっていない。これは猛毒だ。

いいよ。お望み通り死んでやる。

その代わりこのページは開いたままにしておこう。なんだっていいの。疲れたの。本当に私のことが邪魔になったんだね。こんな酷い人だなんて、思ってなかつた。

花を嚙って、口に入れた。奥歯で無理やりすり潰して、飲み込む。不思議と躊躇いはなかった。もう味も感じなかつた。白が完全に私の中に取り込まれると、私は残りをバッグの中へ戻した。私は眠りについた。

・ * · * · *

「だから、全部勘違いなのよ」

再び中毒症状が出たあの子の病室はもう大騒ぎだった。一回目より酷いらしい。慌ててバッグの中を確認した新米医師と思しき男が慌てて声を張り上げる。見ればその手には彼女のスマホがあって、漏れ聞こえてくる会話からするとソウにはややまずい展開になっているらしかった。ああ、可哀想に。隣の当の彼は顔色を真っ青にしているくせに状況を理解してはいないようだ。私の呟きも耳に入ってはいないだろう。

少し前から、ソウから連絡が頻繁に来るようになった。内容は決まって、時子が浮気をしているんじゃないか、自分に愛想を尽かしたんじゃないかというそれだった。自分はまだ好きだけど、信用できなくて、被害妄想に取りつかれて、このままでは酷いことをたくさん言って傷つてしまいそうだ、それは嫌だ、怖いと言うから、とりあえず一度頭を冷やしたら？　よく考えてちゃんと話し合ったらいいよ、きっと勘違いだよと言つたら、なんと家を出たと報告が来た。自分の言葉で傷つけることを恐れるあまり必要なことを全く語らずに。

それであの子はソウの浮気を疑って、自棄になって全て捨てようとした。正直当然だと思う。その過程で、これは理由がわからないのだけれど……毒をあおる。私に話そうとして躊躇って、そのまま倒れる。

それを聞いてソウは慌てふためく。まだ好きだから駆けつける。でも話すことを怖がって、心配の言葉さえかけず、更には仲直りしようだなんて一言を花に込める。きっと、分かってくれるはずだという自惚れに似た確信でも持っていたのだろう。それをあの子は当たり前だけ汲み取ることが出来なかった、だけならまだしも勘違いした。全く、何を見せられているのやら。

「二人とも、何のために口がついていると思っているのだろう」

いつもそう。コミュニケーション不足からくる勘違いですれ違ってばかりだった。私は全部知っている。その時は私がいつも二人の口になっていてあげたから。

こういうちょっと面倒くさい人たちのために先生はいるのだけどなあ。大好きな友人は私に救わってくれない。

「勢いあまって死なないでよ、ソウ。ちゃんと真実を確かめなさい。思い込まないで。まあもう、もうどうしようもないけど」

聞いているのかいないのか分からぬ可哀想な彼を横目に、ガラガラと運ばれていくこれまた可哀想な友人を見送りながら、私は溜息を吐くことしか出来なかった。

あの子、私より馬鹿だから。/星月よる

あの子、私より馬鹿だから。/星月 よる

あの子、私より馬鹿だから。

星月 よる

コーンフレークの上にソフトクリームの乗ったパフェ。ばなな三切れと、苦めのチョコソースもかかっている。長いスプーンで、すいっとすくう私。目の前には珈琲フロートをカメラに収める私の分身。写真撮ればよかった、そう気づいたときにはパフェは半分になっていた。

高校三年生の夏、私は久しぶりにかつての親友と出かけていた。名前は、マヤ。これは仮名だ。私は正直、彼女に対していい印象はない。顔と感性は似ていたが、根本的に合わない部分があるのではないかと思っている。青と藍は違う。似ているけど同じではない。親友だった。ただ、彼女と離れて六年。その間に私は彼女が「親友」とはいえる存在ではないことに気が付いた。

目の前の女は化粧をしている。今日は濃いめにしたの、気合を出して、と笑っていた。変わったと思う。赤い眼鏡に小さな目の子だとずっとと思っていた。可愛いと一度も感じたことはなかったはず。六年見てない間に女はこんなに変化するものか。でも顔立ちはやっぱり似ている。それがまた腹が立つ。

彼女に反して私はすっぴん。なんにもしてない。というより、できない。そんな時間もないし、まるで方法もわからない。私は非常に強く劣等感を感じる。なにかでこの隙間を埋めなければと焦りだす。スタイルは多分勝ってる。じゃあ、そのほかは？

そんなことを考えながら、彼女の顔をまじまじと見ていたら、店員がサンドイッチを持ってやってきた。

「こちら、卵サンドです。柔らかいので注意してお召し上がりください。取り皿は必要ですかー？」

やけに間延びした声で話す店員。茶髪の髪をポニーテールにしているのはいいが、いったい何個穴があるんだと思うほど、耳にはピアス跡があった。つけていないのに、ここまで目立つとなると相当だろう。いや、しかし、そんなことより。私はあわてて声をかける。

「あの、すいません。私たちこれ頼んでませんよ」

卵サンドを指さしながら、ゆっくり話す。友人に話し方が威圧的という指摘を受けてから注意してきたことだった。店員は目をぱちくりと動かして注文票を確認する。暗がりで今まで気が付かなかったが、どうやら眉のあたりにも穴があるらしい。痛くないのかしらん。

「あ、すみません。お隣のテーブルでした。申し訳ありませんでしたー」

店員はぐるっと回れ右をすると、笑顔で先ほどと同じ説明を隣のカップルにしました。きっと卵サンドはもう熱くはないだろう。カップルは苦笑いしている。

店員がいなくなったので、ふうと息をつくと彼女がこちらを見て笑っていた。

「ユリちゃん、全然変わってないね。マヤ、ああいうの苦手なんだよね。こう、はっきりと言いにくい」

マヤは少しオーバーに手を動かしながらしゃべった。そんな小さい子に言うようにしなくとも。私は保育園児じゃないのだけれど。

「言わないでどうするの。誰かの卵サンド食べる気なの？」

「んー、どうしよう。でも、あのサンドイッチ美味しそうだったから、別にそれでもいいかな」

「あ、それはわかる。同意。でも今注文して、あのお姉さん来たら嫌だから、今日はあきらめよう」

そうだね、と言いながらマヤはまた笑った。これも変化の一つだろう。昔の彼女はここまで笑わなかった。オカルティックで神秘的というか、形容しがたいオーラをまとっていることは変わらないが。私の母はマヤのことを、「なにかの新興宗教にはまっている」として軽蔑していた。自分の娘の親友に対してそりやないよ、という気もしたが、きっと彼女が謎の呪文を唱えだしても私はそこまで驚かないだろう。ぽいな、で終わるのかもしれない。それか、何かの本で見た黒魔術かな、とか。これは私が本心から感じていることだろうか、それとも母に言われ続けてそうとしか見えなくなったのか。わからないことが少し悲しかった。

話題が途切れた。二人とも中身のなくなった背の高い器を見つめている。次来たときは別のパフェを頼もうと思う。チョコバナナは予想以上に甘ったるかった。幼いときはこのクレープばかり食べていたというのに。

「ユリちゃん、進路どうするの？」

本当に突然驚いた。ただ、それと同時に来た、と喜ぶ自分もいた。はっきり言って、この子より私が圧倒的に優れているものは学力しかない。

「〇〇大学を目指しているよ。ただもっと上を目指すかどうか……下になることは避けたいけど、それはまだ決まってない」

「へえ、それは凄いね」

そのとき、私はマヤの顔にも劣等感が張り付いていることに気が付いた。面白い話だ。お互い相手に劣等感を持ちながら会話しているなんて。

顔に出す気はないけれど、しかし、マヤが私より勉強が苦手なことは私は仕方ないと考えていた。いや、彼女を知る人ならだれでもそう考えるだろう。彼女は小学五年生の夏休みから、高校二年になるまで学校へは行っていない。父親や、祖父、親族が立て続けに亡くなり、また自分も軽い精神病になっていた。これが母が宗教にはまりそうといった理由にもなる。要するに、心が人一倍不安定なのだ。可哀そうと感じなくもないが、もともと甘えん坊な性格と知っているため、いい理由ができたんだなと私は理解している。第一、当時親友であった私としては、急に学校に来なくなり、なんの相談もしなかったマヤをどれほど心配したか。冬になり、一日だけふらっと学校へ現れた様子を見てどれほど驚いたか。また、その日、なぜ私に初めに話しかけてくれなかつたのか。自分ではなく他の友人が選ばれた気がして、幼い私は形容しがたい感情にかられた。嫉妬だろうか。もっとどす黒いなにかだらうか。

「ユリちゃん、すごいな。○○行けるように応援してるね」

「ありがとう。自分で言うのもなんだけど、高校行ってから、ほんと勉強しかしてないんだよ。毎日。どうにかなればいいと思ってる」

本当に、自分で言うのもだなと、言いながら思った。私は高校生活は失敗したと思っている。勉強だけしていて楽しいわけがありやしない。それほどでもない偏差値の学校で、友人もいない人間が、とびぬけた学力を身に着けたらどうなるか、これをマヤは知らない。羨ましい気持ちはわかるよ。あの子、私より馬鹿だから。でも一回だけでいいから『頭がいい』ってブランドを身に着けてみてほしい。ろくでもないから、あんなもの。着ているだけで嘲笑の的になる。でも脱いだら、きっと、もっとプライドを傷つけられる。一般庶民にはブランド服の本当の重さがわからないんだ。嫉妬と羨望と。

私は毎日、不思議だ。なんで、嫌な視線ってわかるんだろう。なにか物理的に突き刺してきているんだろうか。吹き矢とか？ ただの視線のわりにはオプションが豪華な気がする。

でも、そもそも頭のいい人なんてのは周りよりプライドが高い。私もそう。自覚してくるくらい、自分のこと大好き。だから、そんな人間が周りの下層の奴らに屈服するはずもなく。自分を自分の手で苦しめている。

マヤにはわからないんだろうな。無視されること。悪口を言われること、しかも聞こえるように。毎朝、教室に入るたびに頭痛と腹痛がするんだよ。授業受けていると涙ができるんだよ。保健室に引きこもるんだ。わからないよね、あなた甘えてるだけだもの。絶対そうだ、そうに決まっている。

他の客が注文する声が聞こえる。私たちが静かだからだ。ナポリタンが二人前。できる限り照明を落としたカフェで食べるのは、やっぱりおいしいだろう。レトロが流行だそうだし。

周りの人間に私とマヤはどう見えているだろう。小学生の時のように姉妹には見えないかも知れない。あまりにも二人とも黙っているから、不審に思われている説が一番妥当だ。

お互い顔を見つめてじっとしていた。五分かもしれないし、一時間かもしれない。

今日はもうこの後の予定はない。また近くのショッピングモールをぶらぶらしてもいいし、帰ってもいいと思う。けりをつけるか。ふと、そう思った。積年の恨みここで晴らさせていただく！ というほどの気概はないけれど、恨みがあるのは嘘じゃない。彼女を今も『親友』と呼べない理由はそこにある。というよりも、マヤの件を経て、私は他に親友は作っていない。どうせろくでもないことになると人間不信になったからだ。なぜ、このタイミングで恨みを晴らすなんて考えたのかは、自分でもわからない。ただ、人間の感情なんてそんなものだ。全部説明できるわけじゃない。もう六年以上。時効だとは思うけど、こちらの気持ちが収まつてはいない。

私はふっと息を吐くと、マヤに微笑んだ。

「突然ごめん。単刀直入に言うよ。小学校の時、私のこと好きだったの、嫌いだったの？」

「私は好きよ、親友だったから」

マヤは驚いた顔をした。口から「え？」って言葉がもれている。

「好きだったよ、もちろん今も」

「そう……ありがとう」

意外だった。嫌われていると思っていた。この反応はきっと嘘ではないだろう。親友だったというのは、私の勘違いだったのかと。いや、勘違いというより盲目の片思いくらいが適切かも知れない。

「じゃあ、聞くよ。今更だけど。今まで勇気がなかった。……まず、一つ目、小学生の時。私の悪口を学校中に広めましたね。では、その理由をどうぞ」

私はマヤの細胞の動きの一つ一つまで見てやる、というように目を大きく開いて返答を待った。マヤは固まっていた。フリーズドライされたみたいに。しばらくたって、おそるおそる口を開く。

「わからない、マヤは、そんなことしてない」

そう来ると思った。ただ、その言葉は言わないでおいた。少しでも喧嘩になることは避けたい。

「了解。では、こちらの報告。ある日、学校に行くとなぜか笑われた。友人に問い合わせると、私とユウキさんが付き合っているという噂が流れたそう。尾ひれがついて、もっと酷いことにはなっていたけど、まず軸となったのはこの話。数珠繋ぎで誰に聞いたか質問して、上級生の教室にも乗り込んだ。そこでマヤに聞いたと言われたの。その先はあなたに聞いてないからわからない。あなたが根源だと思っていたんだけれど、どう、思い出した？」

マヤは黙って私の話を聞いていた。途中でもう少し反論すると思っていた。自分たちの座席の上にある薄暗いランプが、一度ぱちっと音を立てた。見上げるとレトロな白熱電球の明かりが、先ほどよりも心持暗くなっている気がする。裸電球を覆うステンドグラスの丸い傘型のランプシェード。こういうものが家に欲しいと思ったことは何度もあるが、金額と、本を読むには暗すぎるということであきらめていた。

「覚えてない。私は噂の根源ではないと思う。でも、噂を広めたのは事実だから、それはごめんなさい」

急に喋られて驚いてしまった。いや、私の方がぼんやりしていたのか。マヤはきっとした顔をしていた。今日の中で一番、人間的な部分がでているように感じられてとてもうれしい。さっきは私がはっきり発言することを褒めていたけれど、マヤだってそうじゃないか。むしろ六年以上前のこと今更言い出している私は負けている。

「わかった。じゃあ推定無罪。……二つ目。これは小学四年生のとき。私は朝学校に行くのが一番早くて、ある日誰もいない教室で机を見ると、自分の机の上に少しだけほこりがあった。でも、そこから毎日量が増えて行って、十日目には教室掃除のちりとりひっくり返した風。私は前日の放課後掃除の終わり、誰もいなくなった時間にこんなことをする人がいるんだろうと思って、一日だけドラマの再放送見るのをあきらめて張り込んだの。かっこいいでしょ。この結果、わかる？」

嫌味な聞き方だと思うけれど、一つ一つ確認していくことにした。おそらく、マヤを目の前にして問い合わせることで長年の雪辱を晴らしている、このことが快感なんだろう。だから、この時間はできる限り引き伸ばしたい。自分の感情を分析することは苦手だけれども、今回は正確な可能性が高い。ものすごい性格悪いなと思う。自分と同じ人間が他にいるとしたら、友達にはなりたくない。

「結果、は、わからない。なんだろう……教えて」

「うん。マヤだよ、マヤがしてた。机の上に置こうとしてた。ちょっと量が酷かったからさ、慌てて教室入って声かけたんだけど覚えてない？ 急いでゴミ箱に向かっていたけど。この件に関しても理由教えて」

できる限り淡々と喋り詰め寄る私は怖いだろうか。ゆっくり、ゆっくり、話していく。隣の席のカップルが店を出て行った。滞在時間が長くて申し訳ない。もう少し頼んだ方がいいのだろうか。普段、カフェといったしやれた場所へ入らない私には、そのマナーがわからない。むしろテレビで見る限りでは、何時間も席から動かない客には軽蔑していた。

「記憶はない。マヤはそんなことしてない」

「そう、記憶がないなら仕方ない。あの日、マヤの掃除場所って体育館だったよね。体育館中のごみ載せられなくてよかったよ」

マヤが急に立ち上がった。大きな音が店内に響き渡る。…店員や他の客の驚く様子が感じられた。

「違う、違う、違う違う違う……！ マヤは、ユリちゃんのこと、好きなの。嫌いじゃないの！」

はじめは大声だったが、後半には聞き取れないような声になっていた。涙声になっている。言葉の意味は理解できなかった。女の子を泣かせてしまったな、その事実だけが少し嫌だった。ふらふらと席に座りなおすマヤを見て、店員が駆け寄ってくる。

「お客様、大丈夫ですか」

私がかわりに答えることにした。今回の店員は、もう少しだけでも気分が上がるとドラグアクイーンになるレベルに化粧の濃い人だった。年齢は推察できない。女性であろう、とは思う。

「あー、大丈夫だと思います。すいません、議論が盛り上がってしまって。えっと、じゃあ、お冷もらえますか。ついでに私のも」

どうすればいいか戸惑ったようなドラグアクイーンは、慌てて水を入れているやつを持ってきた。後日、調べたところ、あれはピッチャーという名前らしい。ちゃっかり自分のものをもらった私は一気に飲み干した。胃になかに急に冷たい液体を流し込んだため、胃がきゅっと締まり、あまり気分はよくなかった。

「マヤ、ごめん。でも、もう一つだけあるから言うよ。また別日に言われるのも嫌でしょう？　こっちもすっきりさせたいの」

マヤは反応しなかった。手で顔を覆っている。まったく、困った。突然店を飛び出して、私が珈琲フロートをおごるくらいの覚悟は途中からできていたが、安いし、ただこれは想定していなかった。私は残念な性格のようで、昔から友人が泣いていると面倒なので無視するという作戦をとる。かまつたら余計複雑になると信じているからだ。おかげで知人からは「冷淡だ」とありとあらゆる言い方で言われた経験がある。親に至っては「あなたは自分以外の人間に関心がない」と言われる始末だった。褒めてはいないと察したので、しゅんとした顔をした覚えがある。だが、私は世界は自分中心で回っていると信じているし、人生という物語の主人公を他人に明け渡すなんて馬鹿げていると思う。みんなそうなはずだ。だからこそ、周囲の人々に命をささげるような革命家やボランティアの常連のような人のことを褒めるんでしょう？

「必殺、強行突破を発動します。では三つ目、ラスト。白いシャーペン、ピンクの定規、カチューシャ、黄色の絵具、猫柄のしおり、キーホルダー。これらの共通点は何でしょうか」

さっさと喋り終えたかったので、早口で言うことにした。じゃあ止めればいいのに、そう心の中の天使が語りかけてきたが、こちらも意地だ。マヤに言いたいことなんて山ほどある。三つに絞っただけ感謝のお礼がほしいくらいだ。このパフェおごってくれないかな。

「『分からぬ』でしょ。続けるよ。これ、私の人生七不思議のひとつ。全部私の持ち物なんだけれど、ある日なくしてね。そうすると、ちょうど一月後にマヤが同じもの持つて学校に来るのよ。変だよね。常識的に考えると、これマヤが盗ったのかなと思うんだけど、反論をどうぞ」

鼻をすする音がした。ここまでくると、泣きたいのはこっちなんだけどと思えてくる。まあ、今更泣かないか。当時は泣いたけれど。でも子供って不思議なもので、次の日には一緒に絵本見ているんだよな。被害者はどちらかって世論調査したら確実に私が勝つだろうけれど。

「違う、偶然だよ。ユリちゃんのものいいなって、思ったから、同じの買っただけ」

聞こえにくいけれど、おそらくこのようなことを言ったのだろう。

「違わないね。キーホルダーって言ったでしょ。あれ、パイレーツ・オブ・カリビアンにはまつた私が、映画イメージして手作りしたものだから。売ってるわけないの……見苦しいよ。マヤが不登校になって、一緒にいる時間短くなつてから、やつと理解した。こんなの親友がすることじゃない。洗脳、上手だね。その特技生かしたほうがいいよ」

最終的に喧嘩になってしまった。できる限り穏やかにを意識していた十分前の私は

どこにいったのだろう。むしろ、家族喧嘩でさえ使わないレベルの言葉をお見舞いしてしまった。

マヤはもう、うんともすんとも言わなくなった。はあ、と思う。いつもこうだ。結局、この子と一緒にいてため息をつくのは私の方ばかり。マヤは無邪気に笑ったり泣いたり。私は六年たった今でも、マヤの毒に対しての抗体は作れていないらしい。会わない方がよかったですな、そう頭の中でつぶやいて苦笑いした。今日のお出かけの提案を先にしたのはどちらだったろう。私だったら泣くに泣けんぞ。

「ごめん、マヤ。ちょっと言い過ぎた。変なアドレナリン出たみたい」

最後に妥協するのもきっと私の方だ。それは、昔からずっとそうだ。何をするにしても。学校で遊んでも、家に遊びに行っても、二人で出かけても、私の意見や意思が最終的に採用されたことはない。私のようなプライドの煮凝り人間が、よくもまあそれに耐えられたなと思う。スタンディングオベーションなのだ。全米が泣くかもしれない。うん、このジョークは使えるな。今日はもう使えないだろうけれど、またマヤと会ったら行ってみよう。あれ、なんでまた会う気なんだ？ 思考がそこまでたどり着くまでにかかった時間は短かった。

自分の発想とは思えないような考えに驚いていると、マヤが顔を上げた。それほど目が赤いわけでもないので、嘔泣かと疑う。しかし、気分が下がったときに泣きはしないけど世紀末を感じる経験はあったと思い出す。涙が出るから悲しいというわけでもないのだ。嬉しくても泣くし。うがった考えはやめておこう。

「ユリちゃん、いま、どんな気持ち？」

かすれてはいたけれど、はっきりとした声だった。

「よくはないね。最悪とまではいかないけれど。マヤは？」

「最悪だよ」

マヤは歯を見せるくらい笑った。ただ、歪んだのは口だけで、目は一切笑っていなかつた。人によっては笑顔と認識しないかもしれない。

「ユリちゃん、あのさ、いろいろとごめんね」

驚いた。まさか、私が促したわけでもないのに謝罪するなんて。「謝ってほしいの」くらいのことはこの後言う予定だった。一般的なモラルとしては正しいけれど、彼女には「モラル」の「モ」の字もないと思っていた。

「それは、全部思い出してくれた、あの三つの件について認めたという解釈でおっケー？」

マヤは思いっきり首を振った。首が取れそうだ。赤べこみたい。いや、あれだと縦にうなづく形になるか。しかし、このノーの表現の意味は何だろう。どういうことか聞こうとしたら、マヤが口を開いたので黙ることにした。

「ううん、認めないよ。覚えてないから。ただ、ユリちゃんがマヤがしたと感じたということは、きっと嫌な思いさせたんだろうなと思ったから。その分の謝罪。ごめんなさい。許してね」

ペコっと頭を下げる友人に、うまく反応できなかった。なんという詭弁。どうしようもない女に魅入られたな、ただそれだけが瞬間に理解できることだった。私は頭の中で白旗を振った。

「なるほど。マヤ、訂正するわ。政治家になるべきだと思うよ」

「ありがとう。ちなみにユリちゃん、現在の心境は？」

「最悪だね」

二人でくっくっと静かな声で笑った。いつの間にか、マヤはお冷を全部飲み干している。飲んでいる様子に心当たりがないのが不思議だ。私もそこまで心の余裕はなかったらしい。空になったグラスの氷がからんと音を立てたとき、私たちは店を出た。

大学一年生になった現在。なんやかんや志望校変更をして、地元に残る決断をした私の判断は正しかったと実感している。まず、一人暮らしじゃないところがいい。受験期の背後に立つたら殺す、というような殺気もなくなり（母親曰く）家族とだらだら喋る時間が幸せだ。

マヤはよくわからない専門に行ったらしい。ダンスの専門なんてあるんだと驚いた。まして彼女は初心者なのだから、よくそこ選んだなと思う。今でもほぼ毎日、メールで会話をする。まったく、お互い肝が据わっているものだ。もう一緒に出掛けたいと私は思わないけれど、きっとまた行くことになると思う。そうしたら、劣等感って顔に書きながら、カフェに入ることになるのだろうか。マヤに対する恨みが晴れたわけではない。というか、一生晴れないと思う。どうせまた直接顔を拝んだら、喧嘩になるのだろうな。次はもっと静かな争いになるかもしれないと、予想しておく。微笑みながら、言葉だけでの戦いだ。マヤももう泣かないだろう。私が泣くことを想像すると反吐が出そうだった。

私はその未来のいつかにあるだろう日に「冷戦予定日」と名前をつけた。

エチュード I / 奥村匡将

エチュード I / 奥村匡将

エチュード I
奥村匡将

未熟な事故

放課後の美術室に僕と彼女の二人がいる。彼女は窓際の席に座って油彩画を描いている。午後の強い日差しが彼女を照らし、輪郭の明瞭な影を形作っている。窓枠をかたどった日向は彼女のいる一空間にのみ存在していて、それ以外は薄暗い。石膏像やキャンバス、生徒の作品——彼女の位置から対角線にあたる、そのような陰気な場所に僕は座っている。僕は芸術に関わることをするでもなく、かといって受験勉強をするでもなく、彼女が絵を描いている様子を見たり、スマホを取り出してネットサーフィンをしたりして、授業時間と放課後との空白の時間を弄んでいる。恐らくこの学校の歴史の中で最後の美術部員となった僕たちは、互いに互いの存在を感じながら、不必要に干渉するわけでもなく、ただ静かな時間を過ごす。

少し前の僕の学級教室での振る舞いといえば、他人との関わりを拒絶するかのように、本を読むふりをすることだった。実際に本を読めるならば良かったのだが、教室の喧騒、他人からの視線——これは僕の妄想に過ぎないのだろうが——は、僕の集中を削いだ。友人と楽しい時間を過ごすという、その場にふさわしい振る舞いができない僕は、本を読むという行為を提示することでしか言い訳ができなかったので、それでも僕は本を読み続けた。

学級の中で集団ができ始めた頃、男子の集団の一人が僕に対して声をかけてきた。やあ！　調子はどうだい。僕はその時、彼の後ろで男子の集団がこちらに、試すような視線を向けていることに気がついた。突然声をかけられたことに加え、そのような状況に置かれていることを察知した僕は、心臓の鼓動が大きくなるのを感じた。そもそも何を聞かれているのかが分からない抽象的な質問だったので、僕は思わず、どういうこと？

と返した。普段会話を全くしなかったので、どのように声を出したらいいか、その勘どころがつかめずに、どもった、活舌の悪い音になってしまった。対して彼も、僕のような相手と話す機会がないからか、戸惑ってしまい、あー、いやその、と頭を搔いた。そ

して、他の人とは喋らないのかい、と脈絡なく尋ねてきた。戸惑いの連鎖はその中で促進され、膨らんでいく。いや話そうと思えば話せるのだけれどね。そうなんだ。でも分からぬ、そうでもないのかもしれない。え、そうなんだ。

結局僕たちは何を話しているのかよく分からなくなって、お互いの持ち場に戻っていく。僕は本の続きを読むふりをする。遠くで男子の集団が、結局何を言っているのかよく分からなかつたわ、と笑う。

君は女子の中で何を考えているのか分からない、不思議な存在として認識されているのだよ。彼女はキャンバスに黄色の絵の具を塗りたくりながら珍しく僕に声をかけた。僕は一呼吸遅れて、なんだ、と返した。その日は雨で、じっとりとした空気だった。手を動かす彼女の制服はひとりと肌に張り付き、白いシャツの布の向こうに艶気な肌色が透けて見えた。部屋の外では運動部が廊下を使って練習をしていた。扉を隔ててその声が微かに聞こえていた。ところで、いつもスマホを見ているけど、ツイッターでもやっているのかな。彼女はパレットに朱色の絵の具を出しながらそう言った。そうだけど、何。僕は彼女に尋ねたが、彼女はすでに彼女の世界に戻っていた。

最近の僕の学級教室での振る舞いといえば、他人との関わりを拒絶するかのように、顔を伏せて寝るふりをすることだった。実際に眠れるならば良かったのだが、教室の喧騒、他人からの視線——これは僕の妄想に過ぎないのだろうが——は、僕の集中を削いだ。友人と楽しい時間を過ごすという、その場にふさわしい振る舞いができない僕は、かつては本を読むという行為を提示することでしか言い訳ができなかったのだが、それに疲れてしまったので、寝るふりをすることで全てをごまかした。

生まれてこの方随分と気を張っていた僕の心は、ぼきりと折れてしまったようになつていて、泥のような感情だけが渦巻いていた。目から絶えず入ってくる情報は僕を絶え間なく責め立てていた。そんな中で縋るものといえば、淡々と常に一定のリズムを刻む、授業と放課後の空白の時間と、何も言わずそれを共有してくれる彼女だけだった。

季節は夏になり、部活の引退が近づいていた。僕たちしかいない美術部はその歴史を静かに終えようとしていた。目のくらむような日光が差し込み、机と椅子が並ぶ部屋に窓枠の形を映していた。彼女はその光の中から僕の方へと移り、僕に囁いた。石膏像を壊さない？　どうせ美術部は終わりだし、大したことはないはずよ。

彼女の支離滅裂な言動は、支離滅裂であっても彼女の言葉なので、僕にとって逆らう余地はなかった。僕たちは陽炎が揺れる外へと出ていき、蝉がやかましく鳴く公園の東屋に座った。僕は机に石膏像を置き、彼女は鑿と金槌を取り出した。彼女に促されるまま、僕はそれを振るって石膏像を破壊していく。子供たちが遊具で遊び、大人たちがベンチに腰掛けてまぶしそうにそれを見ていた。彼女はじっとりと汗ばみ、前髪がぺたりと額に貼りついていた。僕が作業を終えると、彼女は紙袋を取り出して、粉々になつ

たそれを入れた。そして小銭を取り出し、コンビニに行ってソーダ水を買ってきて来てほしい。君も何か買うといいわ。と言った。僕はソーダ水とお茶を買って東屋に戻った。ソーダ水にしなかったのはなぜ。僕は炭酸が飲めないから。ふうん。彼女は蓋を開けてそれを喉に流し込むと、じっと僕を見た。みんなはあなたのことを不思議な人というけれど、実際はただのつまらない人ね。

星空エンカウント

海へと続く夜道は人気が少ない。遠く丁字路にある信号機が、アスファルトや、松の繁る林を照らしている。数十秒から数分単位で、それらは、赤、緑、赤と移り変わる。彼はもう何分もその道を歩きながら、だんだんと、自分が今ここにいるのだという確信を失い始め、ふわふわとした気持ちになっていた。歩くにつれて信号機の灯りが強くなり、影が闇につぶれていく。まるで平面の世界に迷い込んだかのようだと彼は思った。自分の身体さえも、水気のない絵の具で描かれたかのようにのっぺりとしていた。

浜へと出る階段は砂に埋もれ、小高い丘のようになっていた。彼は苦労してそれを上り、息を切らしながら顔を上げた。

そこは延々と続く闇だった。かろうじて流木や漁具が打ち捨てられた砂浜が見える。目が馴染んでくると、その先に、灰色の泡を浮かべた、暗く冷たい海があった。

彼は再び歩き始めた。そうしてから、吸い込まれてしまいそうだと思った。視界に占めるその割合がだんだんと大きくなり、ついに取り囲まれたかのような錯覚に陥った。ざざん、ざざんと海鳴りが反響し、臨界点を越えたのか、一転として静寂が訪れた。心臓が波打ち、胸が張り裂けそうだった。恐怖に足が震え、ついに彼は歩みを止めた。

「わあっ!!」

ばん!! と肩に手を置かれ、彼は思わず仰け反った。脅かした主——彼女はけたけたと笑い、それからスマホの画面を見せた。

彼らは同じ大学の新一年生だが、直接会うのはこの日が初めてだった。お互いにツイッターでやり取りを頻繁に交わしていたが、実際に会おうという発想にはなかなかならなかつた。今回こうして対面(エンカ)したのは、深夜で気分が上がっていたのと、初めて行く夜の海というのに惹かれたところが大きい。

二人はどことなく地に足がついていない様子で、積もる話をした。すべてを吸い込んでしまったような海を前にして、二人は二人でいることで安心した。

彼は彼女と気が合うと思った。彼にとって、人間とは言葉や行動で彼を傷つけるものだった。しかし彼女にはそれを感じなかつた。優しい人なのだとthought。

彼女はよきヒロイン役だった。彼女は彼を傷つけない言葉を選んだ。彼はツイッター上で見た通りの人だった。彼女は久しぶりに始まる何かしらの予感に心が震えた。見上げると、満天の星空が広がっていた。

「ねね。星、きれい」

彼は細い指が肩に触れた感覺と、無邪気そうに空を指さす彼女の仕草に、胸が高鳴るのを感じた。それをごまかすようにして天を仰ぐと、銀色の砂粒が一面に散りばめられていた。彼はなんだか果てしない気持ちになった。今まで努力してきて本当によかったと思った。長いトンネルを抜けて今自分はここにあるのだと思った。そしてこれからもそれは続していくのだと。

彼女に向かって、君は優しい人だねと彼は言った。唐突なその言葉に、彼がすでに夢の中にいるのだということを彼女は感じた。そんなことないよ、なんでそう思ったの、と返すと、彼は自身のことを語り始めた。今までうまく人付き合いができなかったこと。時にはいじめられた経験もあるのだということ。

彼女はよき理解者であろうと、また少しの共感——彼の不幸と、自分の不幸は同質だという認識——つまりは自己憐憫——もあって、自分の体験を話した。トイレに行ったときに、仲のいい友達だと思っていた人が自分の悪口を言っているところを、個室の中で聞いてしまったこと。男好きだという噂を流された経験もあるのだということ。

彼はそれを聞いて、自分の経験はそういう軽いものではなくて、もっと暗鬱としているのだと思った。そして自分の不幸を改めて確かめ、泥のような気持になった。しかしそれは些細なことだとも思った。たった一回会ったきりで全てを伝えられるわけがない——むしろ、これだけ距離が縮まったことが奇跡なのだと思った。冷たい夜風が二人の髪を揺らした。彼はそれでも不思議と温かい心地がした。

海に来て本当によかった、君に会えて本当によかった。気が大きくなった彼は、自身の純粹さを強調するようにして言った。彼女は背中がぞわぞわするのを感じた。君は本当にかわいいね。思わずそう言ってしまったほどだった。かわいいと言われて彼は少し期待外れだったが、それもまたいいかもしれないと思った。大学生になったら格好よくなると思ったんだけどな。彼はそう言って少年のようにごろんと寝ころび、空を見上げた。彼女は無防備な彼をそのまま蹂躪したい衝動を抑えつつ、これからどうしていくかと考えた。

泉 / 鶴飼峰々子

泉 /鵜飼峰々子

泉

鵜飼峰々子

コウズケ

向野の国は古くから養蚕で栄えた国だ。百姓の男たちは稻もそこそこに桑木を育て、そのほか女たちは家に詰めて生糸繰や機織をこなすのが昔からの習いだった。

向野の中でも三宮神社くんだりの商家というのは百姓家の元締めだ。よその国へ上等の着物を売ってたいへん儲けていて、力も強い。ここいらを治めるのには大変繊細な裁量がもとめられた。

将軍様直々の命のもとこの要地一帯を納められるのは向野守様で、治水や干拓など代々土地を治めてきた、名士である。私は十八の時、向野守の家からのお達しに従い、蚕を育てるばかりの家を出て、その三宮の家へ奉公へ出されることになった。

私がそれを決めたわけではない。両親祖父母に囲まれて決定された自分の今後について諭されるのをはあ、はあと相槌を打って聞いていただけだ。五日後に使いの馬が来ることを伝えられ、母親や姉妹が一転攻勢、気の狂ったようにおいおい泣いて悲しむのをボンヤリと見るばかりだった。

向野様の家はいつも奉公勤めの女を探していた。扶持米に事欠かないのはもちろん、そこの姫様が素晴らしくご気性が荒く、ショッちゅう女中衆をとっかえひっかえしなければならなかつたからだ。

私が馬と共に向野様のお屋敷へ上がったときもまた、ちょうど追い出されて生家へ戻る娘とすれ違つたのだが、その娘たちに暇を言い渡したのはイエというその家の女中頭だった。五十を過ぎてほどないはずなのに、黒い髪はほとんど白髪で見る影もなかつた。

彼女は苦しい顔をしながら娘たちの名前を帳面から消し、私の名前を書き入れた。

「ここへ来る娘さんがたのうち、姫様に暇を出されるのが十に九人だ。さあさあ、働いてくれ、人の手が足りんで、私は始終困つてゐるんだ……」

まもなく私には多少まともな着物と帯が与えられ、女中部屋でも一番新入りの眠る襖戸となりの寝床を与えられた。

私の初めての仕事は、姫様のお部屋まで朝餉を持っていくことだった。お屋敷の奥の姫様のお部屋はまったく空だった。私が立ちすくんでいると、表の襖がさっと開いて裸足のままの姫様が泥を蹴散らしながら上がってきた。姫様は六尺あろうかという長身に、結いきらぬ髪をばらばらと散らしながら歩いた。長襦袢の裾は腰ひもに引っかけて、すねのあたりがほとんど見えるほどだった。姫様は枕元へあった快刀を取り上げて腰紐へ刺した。

「お前、今日から働くものか」

姫様がそう仰ったのに、私は何も言い返せなかった。虎の爪が間近に迫ったような、焦げ付くような畏れを覚え、私の唇は震えるばかりだった。姫様は私の目を直ぐに見た。真っすぐな線がその形を作つて、骨の形の美しい顔だと思った。

姫様は私のもとへ大股に歩み寄ると、私の右肩へ手を伸べ、形を確かめるように手を置いた。

「ならば、お前、私を殺そうというのか」

私は必死にいいえ、いいえと繰り返した。汗と、なにか獣のような臭いと、それでもわずかに残る香木の匂いがした。姫様はふうん、と息をつくと、腰の快刀を抜き、怯えて瞑られた私の瞼にさつと沿えた。刃の欠けたそれは、私の瞼の皮を薄く、横一文字になぞった。

姫様は膳の上の米の椀を取り上げ、わしづかみにするとものの二、三口で食いついてしまった。右の瞼を触ると、油のような血が指に触れるのが分かった。

「残りは適当に食つておけ」

姫様は指についた米粒をペロリと舐めると、上等の着物を押しのけ、麻の藍染を羽織り、懷から取り出した短い紐で髪を一手に括った。当然の如く帯は締めていない。

姫様が外を巡る廊下へ歩み寄ると、庭の向こうから真黒な馬が一匹駆け寄ってきて、姫様の前で歩みを止めた。姫様はそれに飛び乗ると、開け放した北の門から野辺へと出て行ってしまった。

姫様の一日というと、薙風という黒馬に乗つて流鏑馬ごっこに興じるか、懐の短刀をナタの代わりに野山を駆けては山ブドウやイチジクを食べるか、時々鳥を射て遊ぶか、そればかりだった。腹が減るとき、蒲団で眠りたいとき屋敷に下り、ドシンと寝転がつてぐうぐう寝てしまう。

姫様の着物はそこの百姓と変わらないただの藍染か、あるいはまるで更のものだけだった。何ともつかぬ獣の皮がないだけいい方だった。私たちの仕事は姫様がめちゃくちゃにするお屋敷や、着物や、その他調度を、イエの命令に従つて懸命に直すことだけだった。一度、ある女中が姫様の眠つてゐる時に綺麗な金の模様が入つたものを蒲団の上に重ねたことがあった。翌朝になると、その着物はずたずたに裂かれ、打ち捨てられていた。毎日がそういう具合だった。

またこういうことがあった。姫様と膳を持った女中のすれ違つた時、何か汁物の椀を取り落とした。ある女中がとっさに、中身を姫様へかけまいと掴んだ。指に突かれ、傾いた椀は中身を姫様の襦袢へすべてぶちまけて、板張りへ落ちた。姫様の襦袢の、すねの中ほどからくるぶしにかけて、薄い色のシミが出来た。

姫様は低い声でこう言った。

「私は悲しいよ。それは私の着物を汚したためではない、お前が私に遣つた、その憎たらしい気持がだ」

吐くようにお前はもう顔を見せるな、と言うと、姫様は膳をひっくり返し、部屋に戻つていった。その女中は何も言えぬまま女中部屋へ下がつていった。

目の回る勢いで女中共は入れ替わり、私がその家に居ついて一か月になるころには見知った顔はほとんど入れ替わるほどだった。姫様は一向に私に暇を言い渡す気配がなく、イエはそれをたいそう喜んだ。私は多少自分に女中として秀でた点があるのかしらん、と期待したのだが、やはり私より見目に優れた針仕事の上手い娘、漢学に優れた破れ寺の娘などが立て続けにおん出されているのを見てそれも違うだろうと合点した。私に他人と異なるところがあるならば、それは極めて頭の回転が遅く、なにか恐ろしいことに遭いまみえたときにぎゅっと目を瞑り、ただ生かしてくださいと神仏に頼み申し上げるくらいのものだった。

イエは私に、余り物のイモ、葛湯などいろいろと融通してくれるようになった。私はそういう余り物が娘たちのもとに回ってきて、ポンヤリしているうちにありつけずじまいだったのだ。

イエはとうに五十を回った年寄だったが、弁舌はしゃっきりしていて長話だった。古くより向野の家に仕える彼女は、家の内情に人一倍詳しかった。

いつしか私の寝床は女中部屋の奥、イエのすぐ側になっていた。そしてイエは私のことをいたく気に入り、何かと話を聞かせるようになった。

それから、だいたい十二夜ほどかけてこのような話をした。向野守のご当主は代々大変な巨漢であるらしい。生まれるときから一貫はある大きな体で、成長につれさらにさらに背丈は伸びる。終いには鴨居に額をぶつけるまでになる。姫様はまだ十四にもならないが、その長身は間違いなく向野守の家系たる証拠である。

聰い者というは概して小さいものである。余分の肉に余分の血が流れ込むと、頭に血が余分に上る。人は過分に獰猛になる。考えてもみよ、天下人というは織田家、豊臣家、徳川家概して小柄である。そして最後に天下を頂いたのは上様の知恵のあってこそ。

戦は絶えて久しく、長年の統治で郎党の類も今は少ない。この太平の世において、武芸に長けたことが果たして何の得になろう？　だれより猛々しい向野守様はほかならぬ上様に恐れられているのである……。

そういう話をしているうちに、彼女の気分が良くなつたらしかった。ある夜の事だった。ちょっといらっしゃい、というと、私を屋敷の裏方の山へ連れ込んだ。その日は大きい月が地表にぶつかりそうなほど迫り、夜目に慣れればほとんど山道を歩くには事欠かなかつた。一面の葦原が木に変り、いよいよ深くなつてくる。ほとんどないと変わらない獣道を半刻ほど行った先に、小さな泉があつた。

彼女はそのほとりにしゃがみこむと、水面を指した。

「この泉水は風が吹けども必ず凧ぐ。木の葉が落ちようと波風さえ立てない。これを飲む猪や狼が殺生をし、汚すようなこともない……。」

彼女のいう事はこうだった。向野守の初代様は決して向野に住まう侍ではなかつた。

初代永忠様は徳川家に忠節を誓い、武倉一帯を占めていた豊臣家のものを打ち倒して素晴らしい武勲を立てた。しかしながら、平時でさえ一度の無礼ですぐさま首を撥ね、家臣の多くが命を落とした。生きているものも非常に恐怖に身を置き続けるから、長生きするものはほとんどなかった。向野守御大は山野に踏み入っては切支丹のものどもを女も子供も構わずに切り伏せた——この地は本来、徳川家直轄の所領であった。というのも釈迦如来の化身が沐浴をしたという泉が領内にあるためである。これを飲めばどのような乱心も一息に静まる——

姫様は生まれたその当初は器量の非常に優れた娘であった。だからこそ忠興様もいたく可愛がり、ご自身のそうされるように泉水をたんと飲ませた。しかし、姫様が七つのころにその母君と共に熱病にかかり、ひと月ほど苦しみ抜いたことがあった。もとより産後の肥立ちが悪かった母君はそのまま亡くなつた。姫様も症状が酷くなつて、途中丸二日ほどろくろく水も飲めない始末だった。姫様は葬儀、加持祈祷の文言を襖越しに聞きながら、うわ言のように「母上が死んでしまう、死んでしまう」というのを女中にしきりに言いかけていた。体の中に巡っていた泉水の最後の一滴の尽きたのは、葉月の末の晩だった。姫様は蒲団を蹴散らして山中に入り、そのまま丸三日の内帰らなかつた。姫様はその内側を狂騒に食い破られてしまったのだ——

イエは泉水に手を浸してみせた。水は墨のように暗く、イエの腕は飲み込まれたように見えなくなる。ただの水のように見えた。

○

ある日の日のことだった。厨番のものたちがやけに騒がしいので、部屋で繕い物などをしていた姫様付きの女中たちもばらばらと廊下へと出た。屋敷の外を一巡りするそれは、庭に面していて、姫様のお姿が見えた。馬を廻へ返し、庭へ入ったところだった。さて、姫様の住まう離れと母屋とは深い篠竹の林になつていて、垣の役割をしていた。しかし、その草木の間からにわかに小さな女の子がひとり、転がるように駆け出してきたのだ。

三つにもならないだろうか。薄い萌黄色の揃えはいかにも春めいて、そのお顔も姫様同様、あるいはすこし幼く美しい。その童子は猫を追いかけて、庭を北から南へ真っすぐに駆けた。姫様はそれを見た。

姫様はその日も、ブナを削って作った薙刀の代わりを構え、たすきをかけて泥まみれの風体だった。女中連中は一歩たりとも近づけず、果たしてどうなるものか、遠方から息を殺してじっと眺めていた。

娘様は姫様の足元で立ち止まり、三尺をも上に浮かんだ姫様の顔をじっと眺めた。もう物も言われる年だったろうに、しかし二人はただ沈黙して互いの顔を眺めた。

そのとき、真っ青な顔をした乳母が篠竹をかき分け、裾を乱して走ってきて、女の子をひしと抱きしめた。それでも二人は顔を突き合わせたまま、ぽつりぽつりと春雨の振り出すのをただ顔に受けっていた。私はまるで鏡を見ているようだと思った。姫様の目の下には大きな青あざがあり、泥まみれで口の端は切れていたが、それでもその冴えるよ

うな美しさはその女童と一向変わりない。いっとう大きい粒が跳ねた時、姫様は目を瞑られた。それをぱっと開くと踵を返し、泥を撥ねながら茫漠たる山野へと帰って行った。

後にイエの言うところには、それは向野守忠興様の二人目の奥方の娘様、つまり姫様の腹違いの妹にあたる。忠興様は妹様の養育に関して極めて慎重であり、産湯に始まり思いつくかぎりすべての水をあの泉からくませ、日に三度は湯冷ましを飲ませているという。

○

屋敷にはたびたび物屋のものが出入りし、注文を訊いたり品を置いて行ったりした。ほとんどは母屋のものとやりとりをして帰ってしまうが、姫様の調度の修理だとか、越中の薬売りは別だった。

姫様付きの女たちが特に親しくなったのは越中の薬屋の丁稚、平治という男だった。小さいながらに立派な体をしていて、軽々と薬箱を担ぎ上げる。黒く焼けた肌ではにかむ様子が実にさっぱりした男であった。

薬屋というものはただ上品の薬を売ればいいというわけではない。美人画だの東海道の図柄だのを贈って姫様がたのご機嫌取りをしたり、宿を借りる折には宿賃に加えて上方の落語、狂言を語って聞かせたり、そうやって聴員にしてもらおうと一生懸命なのである。平治は特に滑稽話の上手な男で、私はたびたび宴席で話を披露する彼の声を襖越しに聞いたものだった。

平治は離れにも顔を出すようになった。平治は良く舌が回り、世話話も冗談も上手いので人気者だった。平治の話し方は変わっていて、滑稽話をするとき、畳にどっかり座り込むと、その周りに人を呼んで円座を組ませる。そして目の前の畳を時に歌姫越えの道に、白波物の飛び回る土倉に変えて、指でトトと叩きながら講釈をした。

昼過ぎに蒸かした芋を出してやった。平治は喜んで食べ、私に礼を述べた。そのように礼を言われることがなんとも久しぶりで、涙が出てしまいそうになった。私が黙っていると平治は不安そうに私の俯いた顔を覗こうとして、それがいかにも子供のようでたまらなく可愛いのである。

私が小さく笑いだすのを見て、平治は困ったように「どうしてですかい、どうして……」と言った。

平治は指の塩を舐めながら話出した。

「姫様はどこですか」

今は山に行っていて、もう暖かい夏だからいつ帰ってくるともしれないと答えると、平治は「お変わりがないようで」と言って笑った。平治は袖を捲り上げると腕に走った一寸ほどの傷を見せて寄こした。

曰く、姫様は昔から武芸を好まれた。数年前までは近所の子供たちを集めて、合戦ごっこに日々興じていた。武家の子供が他所の子供と遊んではならないと言いつけられてい

たが、姫様は粗末な着物を着て屋敷を飛び出し、こっそり子供たちの輪に混じっていたという。白の旗を掲げるのが源氏方で、姫様はその御大将だった。まだ見習いで父親について回っていた平治は姫様の側でその合戦ごっこに混ざった。姫様はそのころでさえ背丈は五尺半を越し、並みの男児の大きさを頭一つほど越していた。その背丈で長い木の棒を薙刀よろしく振り回すものだから、結局白軍の勝つことがほとんどであった。平治の腕の傷は、そのチャンバラごっこの中でもついたものである。平治は商売文句も忘れない。普通このような傷はかなり膿むが、うちの湿布を貼ったら綺麗さっぱり治った、と付け足した。

それにしても、どうしてその遊びは終ってしまったのだろう。そう尋ねると、平治はひどく言いづらそうに続けた。童子のするようなちゃんとばらごっこには相手に怪我や病気をさせてやろうという意思はなく、せいぜい木の棒で殴打したり、土団子を投げるのが闇の山だった。

ある日、いつものように姫様と道場や城下くんだりの子供六平太が組み合っていた。その年頃で姫様と互角にやりあえる男児は六平太だけだった。二人は刃をかまえ、じりじりと鍔迫り合いの構えを取っていた。それが突然、六平太が「あ」と声を上げ、力が弱まった。そこに姫様が二歩ほど踏み込み、その肩を打擲した。六平太は木の棒を取り落とした。腹が二度打たれた。

六平太はじっと砂利の上を見ていた。子供たちは六平太を罵りだしたが、それでも動かず、顔面が蒼白になっていく。六平太はやっとと、「血が」とだけ呟いた。

姫様はにわかにそこへしゃがみ込んだ。子供たちは薄々姫様が尋常の家の子ではないことに気づいていた。もしも武家のヒメサマへ血を流させたのだとしたら、俺の家はどうなってしまうだろう——子供たちは、姫様の足首の内側を、血が一筋流れ落ちるのを見た。何もかもが恐ろしくなって、逃げ出したのだ——平治はそのときのことを謝りに来たという。

平治は庭を眺めた。青い山並みに白い雲が大きく伸びている。私は今の今まで、この屋敷を出て、都まで出て行って仕事を探そうと思っていた。この屋敷で娘たちとひとつところに押し込められているうちに何処かへ行く足も、頭も腐り落ちてしまうような気がしたのだ。もしも平治が許せば、一緒にこの向野の国を出ようと思っていた。漠然と、姫様がいつか人を殺すか、あるいは殺されてしまうかという予感があったのだ。

○

その晩はひどく雨が降った。全員で離れ中の戸をたてたので他の女中は疲れ果て、深く寝ついて、目覚めているのは私のほかになかった。

平治にとって私はただの女中の一人であり、きっと明日にでも忘れてしまうだろう。平治はその小さな犯罪故に姫様のことを思い続けるのだ。

雨戸が開く音ののち、猛烈に雨が板前に跳ね返る音が聞こえた。出でいくと姫様が真暗闇の中、遠くを一心に見つめるように立っていた。

着替えを出そうと振り返ると、姫様が私の腕を掴み、すさまじい力で握りこみ、「行く

な」とだけ言った。その瞬間にも姫様の髪からはぼたぼたと零が垂れた。

私が髪を拭っているとき、姫様が喋り出した。

「客があったな」

「はい、越中の薬屋が」

姫様は腰紐に刺した快刀を落とし、懷から取り出した細手の縄を放り投げた。

「お前、あの薬屋の息子を好いているか」

私はかっと顔に血が上るのを感じた。それでも強情に水気を拭っているうちに、姫様はくつくつと笑い出した。

「私は明日、あの男を私の部屋へ招くよ、綺麗に顔を洗い、着物を着て話をしよう」

私は唇にきつく歯を立ててじっとこらえた。姫様は悲しそうに息を漏らされた。一步、後ろに足を動かすと、姫様の白木の懐刀に足が触れた。

「私にはわかるのだ、いつか人を殺す女の目が……女を殺せる女の目が……だのにお前さえ私を殺してはくれないのだな」

姫様の声は年相応の若さがあり、その呪詛はすべて嘘のように明るく聞こえた。廊下の奥から火を持った娘が一人、こちらへ近づいてきていた。姫様は半ば振り返りながら、口先で囁いた。

「私が気に入る人間は、ただ私のことを殺してくれるものだけだよ——」

翌日、姫様は珍しくも屋敷に留まり、しっかりと朝餉を食べ服を着替え、そして人避けをすると平治を部屋に招き入れた。半刻ほど話しそむと連れ立って屋敷を出て、裏の林へ消えていった。日の沈むころ、帰ってきたのは平治だけだった。

○

翌朝、妹様が屋敷にいないということで全てのものが探しに出された。私たち姫様の侍従がかりだされるころには、乳母らは三宮の門前に馬を出す算段を立てて、出て行ってしまった。

私には姫様があの泉にいるという漠然とした確信があったので、その方角へ向かった。他のものによってさんざ探し回されただろうが、構わなかった。

とはいっても私は正確にその泉の場所を覚えているわけではなかった。いつの間にかおぼろげな道の形も消え、ただ荒れた竹だの、切株だのを踏んで奥へ向かった。

そこは木を切り倒した後の、丸く開けた湿った土地で、背の低い草藪が日の光を受けていた。姫様と妹様がそこへしゃがみ込んで、指先を汁で汚しながら草を摘んでいる。

姫様は私の姿を認め、妹様の手を取ってゆっくりと立ち上がった。

「お前は知っているか分からんが、今日で私は十四になる。私はこの年まで私を生かし、苦しめ続けた父に復讐するのだ」

姫様は妹様をひょいと抱え上げると、その頬に顔を寄せて微笑んだ。

「いずれこの妹も悟るだろう。これさえも狂うのだよ。私にはこの娘の行く末が見えるよ。まだ自分が生きているとも、死んでいるともわからないうちに殺してしまうのが一

番だ……」

話を欠片ばかり理解した妹様は、ひ、ひ、としゃくりあげて泣き出した。頭を振って姫様の腕の内から逃れようとしたが、強く抱き寄せられてそれもままならない。

「水の冥護がなんだ。冥護とやらに憑りつかれて、夢中のままに日を暮らすことは狐狸の祟りと変わりがない。お前は知らないのだ——」

私はどうにか二つ足で立ち、言った。

「お返しくださいまし」

姫様はきょとんとした顔でそれを聞いた。何を言っているのかわからないといった様子だった。

「お前は、生涯この土地と、父親とに縛られる生活をこの妹に強いるのか」

私はもう何も言われず、ただ頷いた。姫様は大きく声を上げて笑った。

「お前、ならこの山のなるべく深くに私の妹を連れてお逃げ。今から三日の内、あの屋敷に戻ってはならないぞ、なに、私の母を殺したあの屋敷のものはみな私が殺す。私がこの毒を食い、この身を以てなにもかも殺す。しまいにはこの泉へ入り、毒の沼へ変えてやろう。なに、この妹はいずれ、殺さまいと懇願したお前を心から恨むだろう。それでもいいなら行け。遠くへ。速く」

私は妹様を抱き上げると、山の深く深くへ歩みを進めた。姫様の袂に詰められた附子の青さが瞼の裏にちらちらと光り、それでもどうにか歩を進めた。

五町ほどもいかないうちに、麓から雁が五十羽ほども飛び上がるのが見えた。私は人殺しだ。泣き止まぬ妹君を胸に抱いて、御免なさい、御免なさいと言って泣いた。

通常作品

通常作品

通常作品

飢えと錯覚 /八崎線

飢えと錯覚 /八崎線

飢えと錯覚

何を食べても満たされないと気づいたのは、小学三年生の時だった。

小さいころから、ずっとお腹をすかせている子供だった。もっとも、自分にとってそれは、当たり前の状態で、他の人間と違うのだと気づくのは遅かった。普段の食事がとくべつ粗末だった、というわけではない。周りの人と、そう変わらない食事をとっていたはずだった。

小学三年生の春、隣の席に座っていた女子は、いつも給食を残した。そのあと僕は転校してしまったので名前は忘れてしまったが、いつも周りのクラスメイトにからかわれ、「お腹いっぱいなんだもん」と、しょんぼりと視線を落としていた。

お腹いっぱいとは、もう食べられないということであろうか。僕はそう考えた。しかし理解できなかった。もう食べられないという気持ちになったことは一度もなかった。食べても食べても、満たされない。食べられる量には決まりがあって、子供の僕はそれ以上に食べ物を求めるることはできなかっただけれど、もしも無限に食べ物を差し出されたら、いつまでも食べられるという気がした。食べている間だけは落ち着いていたが、咀嚼し、飲み込む瞬間に再び渴きを覚える。今となっては、そう表現できるが、当時の僕には、わけがわからなかった。

それでも我慢は得意だから、いつも腹をすかせて、すかせたまま、ごちそうさまでしたと手を合わせた。空腹をごまかして過ごすということは、僕にとって当たり前のことだった。みんなそうなのだろうと、その日までは思っていた。

ある日、例の隣の席の子が、いつものように給食を残した。なぜそうなったのかは覚えていないが、その子が泣き出してしまった。どうせ、周りの男子が何かからかったのだろう。うつむいてぽたぽた涙を流すその子の隣で、先生が優しく声をかけていた。

「泣かなくていいのよ。おなか一杯になるのに必要な量は、人によって違うんだから。でも、栄養が足りなくなっちゃうと困るから、ちょっとずつ、頑張ろうね」

その一言を僕はなぜか鮮明に覚えていた。この記憶が正しいのかどうかを確かめるすべはないけれども、少なくとも、僕はそうはっきりと記憶していた。

それで僕は思った。ということは、僕もたくさん食べれば、「お腹いっぱい」というのがわかるのではないか? でも、試す方法が思いつかなかった。もっと食べたいという気持ちは、よくないことなのだとどこかで思っていたのだと、今では思う。

僕はその日の帰り道、公園に寄った。

水飲み場の蛇口をひねって、水を飲もうとした。

鏽びた鉄の味がした。あまりに不味くて、一度吐き出して、しばらく待って、水を飲んだ。

飲んでも、飲んでも、お腹がいっぱいだとは感じなかった。それどころか、どんどん渴きが増していく気がした。頭の奥が締め付けられて、視界が狭くなった。どんどん苦しくなっていったが、なぜか止めることができなかった。

途中で、水を飲むことができなくなった。苦しかった。なにをしたわけでもなかったが、幼い体は自然に胃の中から水を吐き出した。おぼれた時のように苦しかったのを覚えている。激しくせき込んで水と胃液を吐き出しながら、思った。この苦しいのが、お腹いっぱいということなのだろうか？　でも、隣の席のあの女子は、そうはいってもここまで苦しそうには見えなかった。そもそも、僕は満足したから飲むのをやめたわけではなかった。なぜか飲めなくなっただけだった。渴きも空腹も消えてはいなかった。少なくとも、そう感じた。

だから僕は、その日、気づいた。

満たされることは、ないのだと。

*

ぼんやりと、車窓から見える景色に視線を滑らせながら、そうやって昔のことを思い出していた。

何年経っても、そのときの感覚が消えない。幼いうちに本心から絶望してしまえば、その世界はなかなか覆らないのだろうか。それともただ、その絶望に甘んじているだけか。

最終電車が、スピードを落とし、ホームへと入る。停車。この瞬間はいつも——残業帰りは特に——自分という存在が社会か何かの部品になったような気がして、あまりいい気分ではない。

電車を降りた。ほとんど、乗客はいない。いつものことだ。

腕時計をちらりと見た。深夜一時になろうとしている。眠いなと思った。視界が霞んでいたし、耳鳴りがした。何だろう、疲れているのだろうか。

自動改札を通り抜けて、駅を出た。二分ほど歩いたところにあるコンビニに入って、酒を買う。まぶしさに目がくらんだ。

缶を右手に持ったまま、コンビニを出た。夕飯は会社の休憩時間に摂っていた。もはや慣れ親しんだ空腹は気にもならなかった。

缶の冷たさが、手のひらに心地いい。

あの日、小学三年生のあの日に、未来も、心も、すべてに薄く重い影がさした。満たされることなどないという直感を、ただ確かめ続けるだけの日々だった。……光がなかったわけじゃない。しかしその分、より影は深く暗くなっていっただけだった。

なぜか今日は、昔のことをよく思い出す。今朝、そう、何か昔のことを、夢に見たような気がするのだけれど。忘れてしまった。

手のひらと缶の温度は溶け合って、もう冷たいとは感じなかった。酒がぬるくなってしまう。

家まではあと五分というところだったが、道沿いの公園に入った。一分もあれば一周

できるような小さなスペースが、フェンスに囲まれている。鋳びたブランコが、街灯に照らされていた。

しかしその奥、小さな屋根の下のベンチには、先客がいるのが見えた。目が合ったように思うが、屋根の下はあまりに暗く、それがどんな人なのかは全く分からなかった。

仕方がない。いつだって公共の場は先着順だ。踵を返す。

その背後で、物音がした。何かが落ちるような音。そして、息遣い。

「——宗谷くん？」

声は、ひどくためらって、しかし、迷うよりも先にこぼれ出たというように、頼りなく、痛切で。

そしてまぎれもなく、それは僕の名前を呼んだ声であった。

少し躊躇した。しかし、迷って答えを出すよりも先に、僕は振り向いた。

街灯に照らされて、一人の女性が、ベンチから数歩離れたところに立っていた。その肩で揺れる髪の長さは、記憶に焼き付いた姿と変わらない。

惹きつけられるように目を合わせて、胸をつかまれる心地がした。

「……十和田…………？」

信じられなかった。数メートルの距離を隔てて、そこから僕は動くこともできなかつた。彼女もまた同様のようだ。尋ねるまでもなく明確に、それは、十和田玲奈だった。

最後に会ったのは、六年前——。

高校生のクラスメイトとして出会った彼女は、僕の人生を唯一照らした存在だった。

しかしそのあと、その光は、果てなく暗い闇になった。僕が、そう変えてしまった。

*

少し、話さない？　彼女は困ったように、顔をゆがめて言った。彼女は、常に笑おうとするたぐいの性質の人間で、かつてもそんな変な笑顔をよく作っていたことを思いだす。

僕たちは並んでベンチに座った。何を言つたらいいのか、何を話せばいいのか全く分からぬ。言葉を探して、でも、何も見つからない。僕は缶を開けた。間の抜けた音がした。

一口飲む。思ったよりも、ぬるくなっていた。

「お酒は、よく飲むの？」

十和田はこちらを見ず、そう尋ねてきた。ずっと遠くの夜空に目を向けているようだった。

「まあ、たまには飲むけど、そんなには……たいして強くもないから」

「そっか」

そういうえば、最後にあったのは、高校生のころだから……。そうか、一緒に酒なんて飲んだことはない。僕は同級会も参加していなかったし。

六年ぶりか。

「この辺に住んでるの？」

そう尋ねながら、僕も十和田に倣って、遠い夜空を見上げた。星はほとんど見えず、ひ

とつふたつ、一等星だけがさみしく見えた。

「ううん。そういうわけじゃなくて……」

「仕事か何か？」

どんな仕事なのかも知らないが。

「うん、まあ、そんな感じかな……」

答えにくそうというか、答えあぐねているという感じがする。まあ何か、踏み込んでほしくない事情でもあるのだろう。もう僕は、ただの他人に過ぎないのだし。

「宗谷くんは？」

「僕はすぐそこに住んでるよ。今、駅からのかえりみち」

「え、終電まで仕事してるの？」

「まあね、でもいつもじゃないよ」

「ふうん……」

何か言いたそうだったが、十和田は口を閉ざし、それ以上は言おうとしなかった。

沈黙。

「……にしても、久しぶりだな」

「そうだね」

「六年、か」

「宗谷くんは大学卒業したんだよね」

「うん、で、二年前就職した。十和田も？」

「私は……途中で大学辞めたから」

「へえ……そうだったのか」

全く知らなかった。……当たり前なのだけれど。では、今はどうしているのだろう。と、そんな疑問をかぎとったのか、十和田は照れ臭そうに笑う。

「今はね、働きながら教師目指してるんだ」

「教師？」

「うん。大学続けられなくなっちゃってから、いろいろ考えて遠回りして……でもね、ゼロからでも先生になれる方法があるって知って、挑戦してみようかなって思ったんだ」

とんでもなく大変だけど、と付け足して十和田は苦笑いした。その笑い方も、髪の長さも、変わってない。でも、あのころとは違う。違うというか、なんだろう。

知っているようで、知らない人と、話している、ような。

「ねえ、私にも一口ちょうだい」

一瞬何のことかわからなかったが、ビールか。傾けて見せる。

「なんならもう一本買ってきてもいいけど」

「別にいいよ、一口でいいんだから」

逡巡ののち、缶を渡す。

中途半端に起こしたプルタブを、無意識にか指で押す。そのしぐさはあまりに自然だった。高校生だった、僕たち。こうして公園のベンチに座って、一緒に缶のジュースを飲んだ。いつも僕がプルタブを中途半端にしか起こさないので、十和田は、それを受け取ったあと、癖で押し込むが常だった。

そして、あのころと変わらないことが、もうひとつあった。僕はこの人と共にいると

き、空腹を忘れた。渴きを、飢えを忘れた。

それは満たされるという事と、ほとんど変わりないことのような気がしたのだった。

「僕はさ……缶だと……もっと甘いやつのほうが好きなんだ。チューハイとかさ。でもアルコールは少し強めのほうがいい」

「お酒強くないのに？」

「まあね」

十和田は一口飲んだらしいビールを僕に手渡した。僕は、あのころそうしていたように、その缶を二人の間に置いた。

時が巻き戻ったようだった。ただ鼻をかすめる酒の香りだけが、違った。

「私もだいたい一緒。レモンサワーが一番好き」

「ああ。レモンサワーだったら——」

とりとめのない話は、よどみなく流れはじめた。すぐに思い出す。そうだ。こうやって、話していた。互いに歌うように、リズムを。言葉を。話す事はむしろ不得意だった僕も、十和田も、なぜか二人で話すとき、息をするように言葉を交わせた。僕たちは一緒に呼吸をしていた。ずっとそうだった。あのころ。ずっと、そうだった。

ずっと、僕は、この人を探していた。

夢じやないだろうか。まさかもう一度、話せる日がくるなんて。驚くほど心が暖かかった。満たされる気がした。言葉を交わして。

そうだ。嘘じゃなかった。

僕は確かに、満たされることを知ったのだ。十和田玲奈の声が、言葉が、その変な笑みが、僕の心を照らした。空っぽの心を、吹き抜ける風になった。

唯一の、光だった。

*

僕たちが出会ったのは、高校三年生の春だった。

僕はその頃、ファミレスやコンビニで何かを食べることが増えた。別に、食べようが食べまいがそれはどうでもいいことではあったが、何かを口にしている間は気が楽になることも知っていた。だから、深夜のファミレスでハンバーグを食べたり、コンビニのおにぎりやパンを公園で食べたりしていた。

夏だった。僕は深夜、学校のそばの公園で、コンビニ弁当を食べていた。冷め切った弁当の米はパサパサしていた。

そこに現れたのが、十和田玲奈だった。僕はその子を知らなかった。知らなかったが、制服姿で、泣きながら公園に飛び込んできた彼女と目が合ったとき、さすがに無視はできなかった。

というより、彼女はすぐにはっとして、顔を真っ赤にしたのだが。

「ななな、なな、泣いてませんから！」

「……へ、へえ」

それが僕らの交わした最初の言葉だった。

そういえば、最初に出会ったのも、深夜の公園だった。

僕たちはブランコを漕ぎながら話した。

同じ高校の、同じ年だとすぐにわかった。ティッシュをあげようとしたら断られたから、ティッシュ配りのバイトをしているからこれも仕事だと嘘について無理やり渡した。

「その……親と喧嘩になって」

「そっか」

別に話したくないのなら話さなくともいいと伝えたかったが、何と言つたらいいのかわからなくて、僕はただ頷くしかできない。

「学校いきなさい、って」

「……学校、行ってないの？」

道理で顔を知らないわけだと思った。

「うん。……なんかね、眠れないんだ」

「眠れない？」

「高校生になってから、夜眠れなくなっちゃった。眠くはなるんだよ、なるんだけど、なんでなのかな、どうやって眠るのかわからなくなっちゃって……考えれば考えるほど、どんどん目が冴えて……」

その時僕は、なぜか、「僕と似ている」と思った。そして、この少女は、話したくないことを無理に話しているのではないことも、なんとなくわかった。

「ごめん、初対面なのに、変な話しちゃった」

えへ、と笑ったその顔を僕はちらっと見た。まだ乾かない涙の跡が、頬に残っていた。

「えと……きみは？ 夕飯？ それ」

僕が食べ終えた弁当のごみを膝にのせていたので、それを指して訊いてくる。

「夕飯とは別」

「ええ。すごくがっつりなお弁当に見えるんだけど」

「うん、まあ……僕、昔からすごいお腹がすくんだよ。おなかいっぱいって感覚がわからないんだ。食べても食べても、全然ダメなんだよ」

まるで世間話のように普通に言いながら、僕は内心で驚いていた。

この話をしたことは、だれにもなかったから。何も知らない相手だからこそ、言えることもあるのか。でも、笑われるかなと、それは少し怖いと思った。

「そうなんだ……」

しかし彼女は、まじめな顔で考え込んだ。

「でもさ、さすがにこんな遅くじゃ、体に良くないでしょ？」

「そうかな。いつもこんな感じだけど、別に普通に健康だよ？」

「それに、どうせならおいしいもの食べないと！ でしょ！」

それは意外な発想だった。

「別に何を食べても一緒だよ。何か食べてたほうが気がまぎれるから、そうしてるだけで」

「でも、おいしいもの食べたほうが絶対いい！」

「なんで？」

思わずそう聞いていた。彼女は少し考えた。

「だってなんか、……辛そうだから」

「……君が言うか？」

「べっ、別に泣いてないもん！」

なんて苦し紛れに言った後、ふっと、彼女は笑った。

本物の笑顔は、そうか、これか、と思った。

「ねえ、私たち、なんか、似てるね」

「そうかな」

「うん、なんか、似てる、わかんないけど！　ねえ、名前は、なんていいうの？」

まっすぐな笑顔のまま、彼女は僕に訊いた。

これが僕たちの出会いだった。

あとに残された影だけにのまれ、忘れかけていた、確かな光だった。

*

「びっくりしたよ、突然女の子が、泣きながら目の前に——」

「やめて！　それ以上言わないで！」

なぜだか自然と、話はさかのぼっていった。僕の仕事の話、今住んでいるところ、十和田の仕事や、教職免許の話、大学の話を経て、そして、六年前の別れを飛ばして、出会った頃の、話に。

時刻は、三時をまわる。

「ねえ、でもさ、本当、あの時……私、宗谷くんに会えてよかったですよ」

僕は咄嗟に話を変えそうになった。

でも口をつぐんだ。あの頃は、そんな必要なかったのにな。言いたいことは何でも言えた。言ってはいけない事も隠し事も、あの頃の僕らにはなかった。

「……本当に、そう思ってるよ、私」

あのころとは、違う。何もかもが違い、一つとして、同じものはない。

ただ、記憶があるというだけだ。過去が確かにあるというだけだ。それだけの話だ。

「……憎んでないのか？」

だから、今の、今の十和田玲奈に、言葉を。

「……んー……」

少し、困ったように、十和田は考えていた。足をふらふらと揺らしていた。その横顔は、きれいに化粧がしてある。酒のせいか、頬が赤い。

「憎む……っていうのは、少し違う……」

僕はもう、彼女のほうに顔を向けることができなかつた。上を見る気にもならなかつた。ただ地面を見つめた。

「だけど……許したくはなかつた」

「そっか」

僕は、視線だけをあげた。彼女と目があつた。僕は笑つた。うまくは、笑えなかつた。……なるほど。

「私は……私にはわかるよ。宗谷くんが、どうして、あんなことしたのか。……わかるよ。わかるけど……」

その瞳から、ぽたぽたと涙が、こぼれ落ちた時、僕は、どうしようもなく、どうしよ

うもなくその瞳から目を離せなかった。

ああ僕はこの人のことが好きだったんだと、だからこそ、もう、僕はこの人のそばにいてはいけないのだと、やはり思った。

「会いに……きちゃいけなかつたんだよね、わたし……」

振り向くべきではなかつたのだ。僕は、人違いでしょと笑つて、その場を去るべきだったのだ。

でもどうしてだろう？ いつも渴きは消えない。空腹は満たされない。わかっている。わかっているのに、求めてしまう。何を口にしても、それで腹が満たされることないと分かっていても。

幸福は、幻想の中にしか、ありえなかつた。全部知つていたのに。

「でも——それでも、なかつたことにするには、私たちは、近くにいすぎた。違う？」

そうかもしれない。六年の時を経た。互いが互いを忘れるために日々を生き、それでも、再会したその時、知らん顔ですれ違つことはできなかつた。

その姿に、声に、呼び止めずには、振り向かずにはいられなかつた。

でも……。

六年前。

僕たちは、付き合つてすらいなかつた僕たちは、ただ自然にそばにいた。

僕は卒業式の日に、知り合い全ての連絡先を消した。すぐに大学の近くへ引っ越し、つまり、十和田の前からも姿を消した。だから、卒業式が最後になつた。僕は十和田と最後に言葉を交わした時のことを、克明に覚えている。幼少のころの寂しさより、渴きより、小学三年生のあの頃のことより、そして十和田と出会つたときのことよりも、何よりも鮮烈に、記憶に焼き付いている。

卒業式は、よく晴れていた。僕たちはその日も、いつものように、学校のすぐそばの公園のベンチに並んで座つていた。

僕は言った。

『僕たちは、もう、一緒にいちゃダメなんだよ』

なんで？ と、十和田は笑う事もせず、泣きそうな顔で。そう言った。

『僕たちは確かに少し似てた。でも、互いに、もう変わらなきやいけない』

十和田は実際、僕と共にいるようになつてからも、依然として夜は眠れないままだつた。学校も、留年すれすれでなんとか卒業した状態だつた。

『……それに……』

僕は、変われないかもしれない。だから、十和田玲奈、君は、変わってくれ。君は僕と似てなんかいない。僕は結局、変わらん気がないんだ。君といふと、幸せな気がしたよ。全部錯覚だ。僕は君と一緒にいるを幸せだつた。好きだつたかもしれない。でも僕は、満たされることはなき。なのにはしいと思うのが、怖いんだ。何かを食べるってことは命を奪うつことだ。必要な分だけ食べれば人間は生きていける。そういう風にできてる。でも僕は違うんだ。怖いんだよ。君のことが好きだよ。でもそれは、僕のための感情だ。絶望に甘んじて変わることさえあきらめたくせに、それを恐れて、クズのための感情だ。恋は君のための感情じゃない。そばにいていい理由になんか、ならない。

『——僕は君が嫌いだから、もう二度と会いたくないんだ』

「私は、君のそういうところが好きだったよ」

十和田の瞳から、涙がもうひとつ、まつ毛の先からこぼれた。

「……やっぱり、それだけは言わないと、進めないんだって、分かるまで六年掛かっちゃった」

僕は、間違っていたのだろうか。

間違っていたとしたら、最初から間違っていた。だからどうしようもなかった。

「私、あの時の言葉、それが嘘だってことくらいわかつてた。宗谷くんが何を恐れてるかなんて、分かってたんだ。私の目も見もしないで、あんな悲しそうな顔で嘘についてまで、何を伝えたかったのか、すぐにわかったんだよ」

そりやあ、そうだろう。

でも、僕の言葉に面食らった十和田が黙り込んだその瞬間に僕は立ち上がって、公園の出口に向かった。十和田が僕を呼び止めない事だけを祈った。そしてそれが、別れになつた。いやそれを、別れにしてしまつた。

だから、十和田は。

「言えなかつた」

ぽつりとつぶやいた。

「それが一番いいって思ったから。……思ったけど……」

でも、忘れられなかつたんだ、と十和田は苦笑した。

「だから、ちゃんとお別れしにきたの」

「……そうだね」

そうか、僕は間違えたのか。

「本当」の言葉で、お別れをしなきやいけなかつたのだ。たとえ、言葉がなくても伝えられたとしても、それでも、言葉は必要だつた。

僕のせいで、悩ませてしまつたのだろう。苦しませてしまつたのだろう。突き放したつもりで、しばりつけたようなものだ。どんな六年を過ごしたのだろう？ 眠れるようになったのだろうか、好きな人はできただろうか。僕にはどれも、聞く資格がないことだ。他人なのだから。もう、僕たちは、他人なのだ。いや、最初から。でも、僕たちは錯覚した。まるで僕らが一つの人間かのように。互いの存在だけを幸福だと信じ切り、生きていけるかのように、錯覚した。ただ、それも……僕がそうだったというだけなのかもしれない。

「僕は……怖かった。満たされないことを知つたから。それでも求め続けてしまうことが怖かった。そのせいで、君を縛つて、壊してしまう気がしたんだ……」

僕は好きだつたと思う。この人のことが。

「だけど、僕は十和田に、ちゃんと、幸せになつてほしかつた。……なんて僕は、そうやって、逃げただけなんだろうね」

でも、どうして好きだつたのだろう？ 僕らが似ていたから？ 誰と話すよりも楽しかつたから？ 十和田が、優しい女の子だつたから？ 長い時間を過ごしたから？

どれも間違つてはいない。けれど正解でもない。錯覚。真実心の中は、空っぽのまま。ずっと。だから僕は最後に、逃げることを選んだ。覚悟を決め、十和田のために変わろ

うとする選択肢を、捨てて。

「君は……私と会えてよかったですって思ってる？」

十和田は訊いた。

「思っているよ」

「そっか」

「十和田と一緒に居られて、僕は正直、幸せだった。十和田のことが好きだったよ。……でも、それだけだった」

「それだけじゃ、ダメなのかな」

わからなかつた。何年経つても。

「たとえ、錯覚でも、それでも私、人を好きになった気持ちは、本物だと思う。だけど宗谷くんは……結局は、その気持ちを選ばなかつた。だから、それは……それだけ、じやなかつたんだと思う……うまくいえないけど……」

僕はひどく安堵した。そして、確かにその気持ちが本物だと、思えてもいた。伝わっている。限りある言葉で、僕たちは今、分かり合おうとしている。

「でもさ、宗谷くんの言いたかったことはわかる……。私たちは、似てるから、甘えてしまう。そうでしょ？」

「そうだね……僕たちはたぶん、許しあっててしまうから」

そうならないように、互いに、並んで歩いていくこともできたのかもしれない。ふとそう思った。六年前だったならば。これが、卒業式のあの日だったなら。

でも、もう。

「……もうすぐ、夜が明けちゃうね」

十和田は、僕らの間に置かれた缶ビールを手に取って、僕のほうに差し出した。

それは紛れもなくお酒の缶で。僕たちは今、二十二歳で。

「ね、宗谷くん。私、ちゃんと眠れるようになったんだ」

僕は缶を受け取って覗き込んだ。

「そりやよかったですよ」

「ん。宗谷くんは？ お腹いっぱいになれた？」

「うん。それが、最近はちゃんと満腹になるんだよ」

「そりやよかったですね」

朝日が昇る前に、僕らはいつも家に帰った。深夜。眠れない十和田と、お腹をすかせた僕は、いつも、こうして、二人だけの世界で。そこでは変わら必要がなかつた。互いに許しあうことで完結する。それだけの小さな世界だった。だけどそれだけが、僕たちにとっては、幸福だった。幻想の中にしか、幸福を見いだせなかつた。少なくとも僕はそうだった。でもやっぱり、十和田は違つた。

「にしても、なんで急にこんなところまで来たのさ」

「実は今度、教員採用試験があるんだ。いろいろあったけど、やっとこぎつけたから。リスタート、って感じ？」

「なるほどね……」

最初から、僕に会いに来たという事はなんとなく予想がついていたけど。さて、どうやってここを調べたんだろう。あまり深く考えたくない。十和田は、ベンチから立ち上

がってぐんと伸びをした。少しづつ、空が明るくなり始めている気がする。

「教員って、なんの？　高校とか？」

「ううん。小学校」

「へえ……」

しかし、十和田が教師を目指すようなイメージはあまりなかった。何か理由があるのだろうか。少し考えるが、僕の知りえる情報の中に、教師という職業と十和田を結びつけるものはなかった。

十和田はすとんとベンチに腰を下ろして、再び遠い夜空を懐かしそうに見つめた。

なぜか突然その横顔が、全く知らない女性のように思えた。

「私ね、小学生の時、給食をいつも残しちゃってたんだ。それで……男子にからかわされて泣いちゃって。その時にね、先生が言ってくれた言葉が忘れられなくて」

……あれ？　その話なら、聞いたことが……。

「泣かなくていいんだよって。食べられる量は人によって違うんだから、気にしないでいいんだっ、って。健康でいられるのが一番なんだから、先生は玲奈ちゃんが元気ならそれが嬉しい、って、そう言ってくれたんだ」

それは、僕が小学三年生の時、隣の女子に向かって先生が言った言葉と酷似していた。しかし細部は違う。どこにでもある話ではある。でも僕は、小学三年生の時転校した。僕は家の話だけは、一度も十和田にしたことがなく、それで、転校の話もしなかった。僕たちはかつて……同じ小学校に通っていたかもしれないのか。なぜ今まで、思い当たらなかったのだろう。

僕は十和田の横顔をもう一度見つめた。きれいに化粧されたその顔に、確かに高校生のころの十和田玲奈の面影はある。でも今の十和田玲奈は、僕の知らない、一人の人間なのだ。いや、最初から、僕たちは、一人と、一人だった。

僕たちは互いに、互いの知らないところで大人になった。少なくとも、大人になったフリくらいは、できるようになった。いつの間にか酒も飲めるようになった。嘘だって、あの頃よりずっと上手に吐けるようになった。

「——ねえ、何黙ってんの？　そんなに大したエピソードでもないでしょ？」

「ああ……そうだな、いい先生になりそうだね、十和田なら」

「うん、いろいろ不安だけどねー、まず教採通るかなあ……」

「てことは、地元に戻るんだね」

「そうだね。宗谷くんは？　みんな心配してるよ？」

「ああ……まあ、そのうちね」

「帰る気ないでしょー」

「まあでも、今度の同級会は行こうかな」

「一回くらいは顔出しひきなよー、死んでると思われるよー？」

十和田はにこっと笑った。少し酔っているのだろうか。あまりに自然な笑顔は、それでもあの頃とほとんど変わりなかった。

十和田は、確かに変わって見せた。僕が身勝手に、望んだように。

では、僕は？

変われるのだろうか？

空が白んでいく。忘れていた空腹を、空っぽの痛みを、思い出す。魔法が解けていく。
最後の魔法だ。恋という、魔法。

そうか、僕は十和田のことが、好きなままだったのかもしれない。囚われていたまま
だったのは僕のほうだった。囚われたまま、立ち止まったまま、逃げたまま、変わろう
としなかったのは。僕だ。

「十和田、その……来てくれてありがとう」

「ううん。……私、宗谷くんのこと、許したくなかった。でも最初から許してたよ。馬
鹿だから」

十和田はそういって、ちょっと眉を下げて笑った。

やっぱり、僕と十和田は根本的に違って。

でもきっと、だからこそ。

「じゃあ、そろそろ、私行くね、一応ホテルまでさ、荷物取りに行かないとだから」

「そっか。送ろうか？」

「いや、もう朝だし、大丈夫だよ」

「そっか、じゃあ僕も家に帰るかな」

「……というか、明日仕事だったりしない？」

「ああ……明日は休みなんだよ」

僕たちは、そうして別れた。今度こそ本当の別れだった。でも、また会えるだろうと
いうのが、不思議だった。六年前の別れは、これ以上ないほどの断絶であったのに、そ
れでも偽りであった。

「宗谷くん、あの時、私に変わって言ってくれてありがとう」

今度の最後の言葉は、それだった。

*

家に帰って、お湯を沸かした。

カップラーメンを開け、お湯を注いで、三分待った。

朦朧とする頭で見上げた時計の針は、四時半を指していた。

僕は、誰かのせいにしたかっただけだった。

三分が経ったあと、ラーメンをすすった。安っぽい味がした。少し早かったのか、麺
が硬かった。

だけど何故だか、美味しいと思った。

エチュードⅡ / 奥村匡将

エチュードⅡ / 奥村匡将

エチュードⅡ

奥村匡将

火に関するイメージ

ぼくが火についてまず思い出すのは、小学生のときに火災現場に遭遇したことだ。当時ぼくは、スポーツ少年団で野球をしていた。練習は小学校のグラウンドで行われた。白く、滑りやすい、かたい土で、転ぶととても痛かったのを覚えている。小さなぼくにとって、その場所は果てしなく思えるほど広く、ボールは岩のように大きくて硬かった。練習は厳しく、永遠にも思えるほど長かった。ある日、ぼくはバッティング練習の合間に、蛇口をひねって水を飲んでいた。小学校の水道から出る水は、少し濁っていて、ほんのり鉄の味がする。それでも練習でへとへとになったあとには、ふだんどんなソフトドリンクを飲むより、ぼくは夢中でそれをむさぼった。あんまりおいしいので、たくさん飲みすぎて、おなかが痛くならないように注意しなければならないほどだ。その日もそうしていたところ、水道の錆びた銀色に、赤みのオレンジ色が反射して見えた。目がおかしくなったかと思って、奇妙だなあと感じたが、そのまま水を飲んでいた。すると、近くで「火事だあっ!!」という声が上がって、ぼくはびくつとなった。振り返ると、少し遠くの方で、煌々と家が燃えていた。黒い煙がもくもくと立ち上り、はるか空のかなたで消えていた。ぼくはすぐに不安を感じた。その不安は心の中で反響し、増幅していった。なんでこんなに重要で、規模の大きいことに気づけなかったのだろう。いや、ぼくは気づいていたのだ。ぼくは誰よりもはやく、その赤みがかったオレンジ色のゆらめきに気づいていた。しかしその可能性から目を閉ざしていたのだ。ぼくはとんでもない過ちを犯してしまったと思った。不安が心を支配し、喉につかえ、くちびるを震わせた。ぼくは厚ぼったいズボンのすそをぎゅっとつかみ、心を落ちかせようとした。手からじっとりと汗が出て、ユニフォームに吸い込まれていくのが分かった。ぼくははやくこの場から立ち去って、なにも見ていないことにしたいと願った。しかし、それをだれかに見られたなら、ますますことが悪いほうへ転がる気がした。ぼくはどうしたらいいか分からず、ただそこに立ちすくんだ。ばたばたと足音がして、監督がこちらに向かってきた。まだそんなに年齢は高くなかったけれど、色黒で、深くしわが刻まれていた。肌から浮き出るような大きな白目がぎょろりと覗くと、ぼくは射すくめられたように全身をこわばらせた。

「なんでてめえ言わなかった!!」

監督は火のほうを指さしてがなった。空気が震え、身体がきしんだ。不安と恐怖が渦

を巻き、いまにもあふれ出しそうだった。弁明への理性はこなごなに碎け散り、ぼくになんの言葉も与えてくれなかった。そこに救いの手が差し伸べられた。コーチがホースを抱えて走ってきて、ぼくに叫んだのだ。

「繋げ！　水出せ！　手伝え！」

コーチは消防団員で、有事の際には消火活動にあたっていた。練習をちょくちょく抜け出すのは知っていたけれど、実際に活動しているところを見るのは初めてだった。その迫力に、監督でさえも一瞬たじろいだように見えた。コーチはホースの片方を持って走っていった。もう片方は投げられ、ぼくと監督の足元に転がった。ぼくは混乱した。繋ぐって、どこに。監督はいらだったようにホースを取り上げると、一段低いところにある蛇口にそれを取り付けた。

練習はなし崩し的に中止になった。ぼくは自分の失敗がうやむやになったうえ、つらい練習がなくなったので、明るい気分になった。ぼくや、ぼくのチームメイトは、火災現場に野次馬をしにいった。大人たちはほとんど現場を手伝っているようだった。少なくとも、ぼくたちがスパイクのままアスファルトに出ていることを注意する人はだれもいなかった。ふだんなら、スパイクの刃がすり減ってしまうので、アップシューズに履き替えるようきつく指導される。でも、やるなといわれたらやりたくなってしまうのが、このころのぼくたちだったのだ。しかしみんなそんな小さなわくわくやそわそわなど忘れてしまうほど、吸い寄せられるように燃え上がる家に見入っていた。ぼくたちはそれぞれの瞳に炎を映し、顔を赤く染めながら、口を少し開いて、なにも言わずにそこに立っていた。ぱちぱちと燃え上がる炎、その熱気、独特のにおい、……。ぼくたちは、少しおかしくなっていた。みぞおちのあたりがぞくぞくするような感じがした。となりの人間にこやかに笑いかけてハイタッチしたいような、ピンを手に持って思い切り叩き割りたいような、トランポリンの上ですっと飛び跳ねていたいような、そんな気持ちになっていた。

しばらくすると、遠くのほうでざわざわとどよめきが上がった。近づいてみると、家に住んでいた人と思わしき家族と、それをなぐさめる人々だった。家族は、母親が一人と二人の小さな兄妹だった。兄のほうは涙をこらえて、妹の手をぎゅっと握っていた。妹はわんわん泣いていた。それはよくあるドラマのワンシーンのようだった。つまり、現実味がなく奇妙だった。母親のほうはもっとすごかった。「うわああああああ」と発音しながら涙や鼻水を垂れ流していた。それはあくまで記号表現に過ぎなくて、彼女の意識はもっと深いどこかへと潜り、そこに閉じこもってしまっているかのようだった。もぬけの殻となった彼女をなぐさめるまわりの声は、彼女自身の魂にはもはやひとかけらも届いていないように見えた。

ぼくがいまこの記憶について思うことは三つある。一つ目は、ぼく含め多くの人が火に魅入られていること。二つ目は、それと対比を成すように、家族が火に絶望していること。三つ目は、メタな視点で言って、火はぼくたちの意識の外から現れ、ぼくたちをかき乱すということだ。

火に魅入られると言われて思い出すのは、幼稚園のときにキャンプファイヤーをしたことだ。ぼくの通った幼稚園では、キャンプ場に一泊する遠足があった。ぼくは臆病なので、長い時間をたくさんの人と共有するのはあまり好きではなかった。バスに揺られてキャンプ場に行く途中で、ひどい車酔いになつたし、自由時間に男子だからという理由でかりだされた鬼ごっこでは、すべりやすい芝生に足を取られてさんざんだった。それでも、キャンプファイヤーは特別だった。山が寂静まり、深い闇がぼくたちを抱く中、ぼくたちの小さな世界だけを温めるような炎が、辺りをひそやかに照らしていた。ぼくたちはそれを囲むようにして手をつなぎ、歌い、踊りを捧げた。ぐるぐると火のまわりを回るうちに、それはだんだんと大きくなり、やがてぼくたちを飲み込んだ。ゆりかごの中にいるようにゆらゆらと揺れた。つなぎ目のない白くて薄い衣に包まれて、すべての感覚が失われていった。気づくと遠足は終わっていた。

ぼくたちはあの不確実であいまいなゆらめきを美しいと思う。しかしそれを口に出すのはすこしばかられる。それはきっと、火はぼくたちにとって良いほうにも、悪いほうにも揺蕩うものだからだろう。

あれは中学生のころ、珍しく土曜日に休みとなった父と一緒に家にいた。母は美容院に行き、昼過ぎに返ってくる予定だった。ぼくはチャーハンをふるまおうと思って、フライパンを念入りに温めていた。店と違って家庭の火力は小さいので、そうやらないとばらばらのチャーハンができないと思ったからだ。しかし加減が分からなかったぼくは、フライパンを火にかけすぎた。油を敷くとたちまちそれが燃え上がり、火柱が立った。あまりにも唐突に現れたそれに、ぼくは驚き、言葉も出なかった。火を消す方法を考えたが、頭が真っ白になって、なにも浮かんでこなかった。助けを求めるようと思ったがうまく声が出なかった。ぼくは泣きそうになった。鼻の奥のほうがつんとして、喉がきゅっと閉まった。なんとかそれを鎮めて、つとめて冷静に、ふだんするように父を呼ぶと、やっと声が出た。

父は振り返ると、素っ頓狂な声を上げて、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。それがあまりにもおかしいので、思わず笑いそうになったほどだ。父は「入れろ!! なにか!!」と言った。ご飯を入れるとそれはたちまち消えた。その日のチャーハンはとても香ばしく——端的に言えば焦げ臭かった。当然のことながらぼくは二度と料理をさせてもらえなかった。

このチャーハンの件は今となっては笑い話だが、父としては悪夢のような恐ろしい出来事だっただろう。あの必死の形相——ユーモラスな——やや不謹慎だが——には、今まで積み重ねてきた生活が一瞬に崩れ去ってしまうかもしれないという恐怖や、その悲哀が詰まっていた。ぼくはあのとき、子供特有の注意散漫さによって、うっかり悪魔

を呼び込んでしまった。それはふだん厳重な管理のもとで、経験や知識、分業によって制御されている。その世界の理や均衡はグラスの淵に乗るコインよりも不安定だが、ぼくたちはそれから目を背けている。そして美しく、妖しくゆらめくものたちを共同体から締め出し、または道具として骨抜きにすることで、無意識の海に葬り去っている。ぼくたちは洞窟の中でかれらの影を追っている。かれらを直視したなら最後、ぼくたちは目を奪われて、洞窟の外へいざなわれる。それは退屈でつまらない暮らしからの脱却と、つらく激しい環境との遭遇とを同時に意味する。

これも中学生のころだったと思うが、話題となっていた怪獣映画を友人と見に行った。スクリーンに映し出される非日常的な世界にぼくは一喜一憂していた。しかしそれはあくまで映画であって、日常と地続きなものだという感覚はなかった。しかし映画の終盤になって、東京の街が燃えているのを見て、喉がひゅっと鳴った。冷たく光るナイフを突きつけられたかのようだった。ふだん愛国心を意識的に持っているわけでもなければ、東京の街にゆかりがあるわけでもなかったが、それでも身体がわななくような、奇妙な感情に襲われた。ぼくはあの、家が燃えてしまった家族のことを思い出していた。かれらはこれまでの暮らしが崩れていくことに対して悲しんだり怒ったりしていたのだなど、そのとき唐突に合点がいった。一方でこの崩壊を呼び出したのはぼくたちだという感覚もあった。ぼくたちはあまりにふだんぼくたち自身が立つ場所の不確実性や、ぼくたちの外にある妖しい世界の負の側面に無邪気すぎて、退屈な日常に現れた美しい影を追い、あるいは世界の約束を無知ゆえに犯してしまう。しかしそれはぼくたちがかれらから目を背けていた帰結でもあるのだ。火はただゆらめく。外部のものと複雑に作用しあいながら即興で搅乱し、次の世界のダイスを振る。

プール

僕が通っていた中学校では、十回プールで泳ぐことが夏休みの宿題の一つだった。カードが配られており、一回泳いだらそこにハンコを一つ押してもらう仕組みになっていた。プールは中学校のほかに、公営のものでも可とされていた。僕はそっちの方が好きだった。

しんと静まった家を出ると、むわりとした熱気とともに、けたたましい蝉の声が聞こえた。細道を抜けて県道を歩くと、ぶおんぶおんと車が行き交い、エンジンの音が耳をくすぐった。

公営プールは遠かった。いくつもの信号を待ち、それを越えた。アスファルトから放射される熱がじりじりと肌を焼き、そこに汗が伝った。服がぴたりと貼りついているのに、あらかじめ履いておいたスクール水着の部分だけはさらさらとしていて、奇妙な感

じだった。

陽炎が揺れる坂道の上の、緑が涼しげなスポーツ公園の脇にそれはあった。入ると中はひんやりとしていて、ほんのりと塩素のにおいがした。僕は職員さんに百円玉とプールカードを渡し、職員さんはハンコを押したプールカードを僕に返した。あたりは薄暗く、透明なプラスチックの板で仕切られた職員さんの部屋にある、がくがくと揺れる扇風機の音だけがかすかに響いていた。

立てつけの悪いドアをがらがらと引くと、ロッカーがいくつも並ぶ更衣室の中、遠くではしゃぐ声が聞こえた。ぼってりと腹に肉をこさえたおじさんが、通りがかりざまにこちらをちらりと見て、奥のほうに消えていった。僕はそこから一等離れた場所を選び、そこで着替えた。ロッカーの中の網棚が錆びていて、そこに服を押し込むと、少し嫌な感じがした。

プールは広く、大きな屋根がかぶさっていた。小さくて浅いプールでは、子供が浮き輪を持って遊んでいた。大きいほうのプールでは、右側のいくつかのレーンが、泳いだり、歩いたりする人のために確保されていた。

僕は水に足をつけて慣らしてから、ゆっくりと体を沈めた。ぞわりとするような冷たさが体を貫き、それからじんわりとした温かさに包まれた。壁を蹴ってすると泳ぐと、初めのほうはひんやりとした指で肌をなぞられているかのようだった。しばらくすると、それも気にならなくなってしまった。

向こう側のレーンでは、薄い胸毛が縦に走っているおじいさんが、水の抵抗を感じながらゆっくりと歩いていた。僕のいる側では、集団が二、三個あって、それぞれにそれぞれのことをしていた。僕はその間を縫うようにしてプールの一番深いところへ泳いでいた。そして大きく息を吸い、鼻をつまみ、ぐるりと縦に一回転した。

視界の先に無数の白い泡が立ち上り、水圧が耳をきゅうと締め付けた。静寂の中で世界がぱたりとひっくり返り、僕は地球の裏側を見た。

水面に顔を出すと、そこでは変わらずはしゃぐ人々、黙々と歩くおじいさん、ビニールの天井の向こう側で輝く夏の太陽があった。僕はゴーグルと、耳に入った水を隔てて、しばらくそれを感じた。

採光窓の外では力強い日差しが木々を照らし、くっきりとした影を作っていた。たくさんの声が、ずれたり重なったり、大きくなったり小さくなったりした。僕の体は冷たい水の底に沈み、意識はそれからほんの少し離れたところにあった。

こうやって生きていくんだろうなと思った。

ツーブロック

大学受験時に鬱病を発症した。鬱病と言っても明確に診断されたわけではないので正確なところは分からぬ。ただあれは鬱病であつただろう、鬱病でなければならない、という謎めいた信条があった。鬱病を発症するまではすこぶる成績の調子が良かった。着

実に伸びていく偏差値のグラフを見て、右肩上がりという言葉は自分のために作られた言葉だと思った。鬱病を発症してからは酷いものだった。ちょうど風船が弾け飛んだみたいだった。すべてが終わったのだ。グラフはさながら崖のごとしだった。努力によって少しづつ伸びていった成績——その過去など無に等しかった。そのまま前期試験を迎えてあえなく僕は塵と化した。口だけはなぜかよく回ったので、後期試験で面接試験のみの大学に受かった。

都内の進学校に通っていたので、当然都内の大学に進学するものだと思っていた。鬱病を発症してからはそんな「とらわれごと」などどうでもよくなってしまった。ともかく早く大学に行ってモラトリアムを手に入れたい。できれば進学先は遠く離れた自然豊かな場所がいい。親戚など誰もいないほうがいい。首を吊ったなら一、二日はそのままにしておいてほしい。そんな動機で選んだ大学やその街は果たして素晴らしいところだった。大学は市街地から一段高いところにあって、それを見渡すことができた。街はだだっ広い平野の上にあって、背の低い建物がだらだらと続いていた。土地の使い方も時間の使い方も贅沢だった。東京のそれとは比較にならない。

僕はたまたま大学と同じ高台にあるアパートをおさえることができたので、暇さえあれば街を一望してその写真を撮っていた。その時は決まって青空の下で心地よい風が吹くのだ。実際のところ、雨が多くて天気が変わりやすい土地ではあるから、僕のこの語りは多分に美化されているのであるが。

僕は写真を撮るだけで実際その街に下りていくことはしなかった。いずれすることになるだろうと思っていたからだ。しかしその機会は案外訪れないものだった。この街に来てから二か月が過ぎていた。僕はその間の生活をあろうことか高台のみで済ませていたのである！　コンビニと通販さえあれば特段動き回る必要性がないということを僕は発見した。

しかしてついに街に下りる機会が訪れた。髪を切ろうと思ったのだ。この街の勝手がわからないので、ホットペッパービューティーで適当なものを見繕って予約をしたら、その美容室が高台を下りた街中にあった。僕はついにこの時が来たかと浮足立った。このように僕の精神状態は劇的に回復していたのである。

この街の「お決まりごと」として僕は傘を手にして家を出た。天気が変わりやすいこの土地では傘を持って出かけるのが必須なのだ。しばらく街に向けて歩くと坂がきつくなってきた。住宅街の中で、家は決まってコンクリートでならされた土台の上に立っていた。それを過ぎると電車の踏切があって、そこで一気に視界が開けた。線路は崖の上ぎりぎりを走っていた。それを縦断する、いま僕が歩いている道は、踏切を超えると、がくんと下る坂道になっていた。黄色と黒の縞模様の遮断機の向こうには、例のだらだらと続く街並みがあった。それはジブリ映画のワンシーンのようだった。腰を曲げたおばあさんが乳母車を押してゆっくりと坂道を上っていた。

坂を下ると小さな川が横切っていて、橋が渡されていた。なんの見どころもない風景ではあるが、一人の大学生が、欄干に手をかけて、それをぼんやりと眺めていた。僕はその光景を好ましく思った。写真にすら撮りたいと思ったが、その大学生に悪いので、それは自重した。

しばらく歩くと美容室があった。とても洒落たつくりをしているのだが、この街では、

生活感というか、パステルの絵の具で描いたような空気感に包まれてしまうのだから、不思議なものである。

店に入るとオーナーとアシスタント一人がにこやかに応対してくれた。オーナーはウェーブがかかった茶色の髪の毛をしていて、いかにも洒落たオジサンといった面持ちだった。一方アシスタントは自信なさげな金髪で、これまたいかにも見習いの若者といった感じだった。オーナーに関してはホットペッパーに情報が載っていたのであらかじめ知っていた。東京の店で働いていて、十年前にここに個人の店をオープンしたそうだ。「東京」というところに何かすごい自信を持っていそうだな、と感じた。

「初めてご来店のお客様にはこれを書いてもらっているんですよ」ということで、住所や電話番号を書く紙を渡された。おそらく話のネタにするのであろう、趣味や出身地を書く欄もあった。趣味の欄は「特にありません」と書いて、出身地には「神奈川」と書いた。なんとなく、「写真撮影」「東京」と書くのは憚られた。

「神奈川から来たのならこの街はずいぶん田舎に見えるでしょう」とオーナーが霧吹きを手に言った。「まあそうですね」と僕が言うと「私も十年前は東京の美容室で働いていたんですけどね、こっちへ来るとやっぱり田舎だって感じがしますよね」と僕の回答を待っていたかのようにオーナーが言った。取り繕うかのように霧吹きがシュッシュュッと二回鳴らされた。僕は「へえ東京で働いていたんですか」という愛想を使う労力を惜しむ種類の人間なので、何も言わずに次の彼の言葉を待った。しばらくの沈黙の後「髪型はどうなさいますか」と聞かれたので「特に希望はありません」と返した。これは意地悪ではなく素直な気持ちを言ったまでだった。髪型に興味はなかった。おおよそ僕自身について興味がなかった。

オーナーは目先を変えて「『大学に入ったら印象変えたい』みたいなことってある?」と聞いてきた。自然とタメ口に変えて親密さを出そうとしているのが見事だと思った。僕は「どっちでもいいです」と返した。本当にどっちでもよかった。「やっぱり大学入ったら友達とか恋人とか作りたいでしょ」とオーナーが言った。僕は「友達とか恋人とかいても、面倒なので、いいです」と言った。

オーナーはツーブロックを提案してきた。髪型を変えるのは抵抗があると思ったのか「似合うと思うよ」「清潔感が出ていいよ」とフォローしてきた。僕は性格が腐っているので「今の見た目は不潔だよ」と言っているようにしか聞こえなかった。「どっちでもいいです」と僕が言うと、オーナーは少し意外そうな顔をして、「じゃあツーブロックにしてみよっか」とバリカンでいそいそと髪を刈り上げ始めた。僕は崖のようにがくんと下がるツーブロックのシルエットを想像した。

「部活は入った? サークルは?」「家では何しているの?」という質問に「していない」「めんどくさい」「寝ている」というような怠惰な回答をした結果、オーナーはだんだんと質問の回数を減らした。僕は客商売なのだなあというわけのわからない感想を抱いた。相手を不快にさせたらそれで終わりなのだ。いまの僕にとっては、その深入りしてこない距離感が心地よかった。

髪を切り終わって、顔剃り、シャンプーなどを終えた後、アシスタントが軽いマッサージをしてくれた。「大学に入るとやっぱりレポート大変?」とアシスタントが聞いてきた。年齢が近いだけあって質問が具体的だなと思った。「高校の課題のほうが大変だった

「のそなに大変だとは思いませんね」と僕は言った。「へえ高校は大変だったんだね」とアシスタントが愛想を言うのを聞いて、僕はしまったと思った。

店を出ると雨が降っていた。当たり前のように傘を持ってきていたことに気づいて、僕は何とも言えない気持ちになった。僕はこの街の規範を獲得していた。なにかにとらわれることを嫌った一方で、喜んでなにかにとらわれる自分がいた。その都合のよさを思った。

雨はますます強くなっていた。傘を雨粒がバタバタと音を立てて打った。僕は例の踏切の坂に差し掛かっていた。雨水が川のように坂を下った。艶っぽく濡れた遮断機に僕は吸い込まれるような思いがした。意識の境界があいまいになって僕は東京のことを思い出していた。線路の上に立って電車が来るのを待った。鉄の塊が弱い僕を粉々にするのを何度も何度も頭の中で繰り返した。お腹の下のほうからぞわぞわと恐怖心と高揚感がないまぜになったものが立ち上ってくるのを感じた。逃げ出したい気持ちと破滅願望とが拮抗して僕の足を止めていた。カンカンカンカンカンカンカンカンと遮断機の音が聞こえた。ファーンという電車の警笛が鳴り響いた。ガタンゴトンガタンゴトンと車輪とレールがかみ合う音が繰り返した。

通り雨が去って依然として僕は線路の上にいた。電車はまだ来なかった。僕はそれを確認してとても愉快になった。田舎万歳！ 田舎万歳！ 僕の選択は間違っていなかつた！ 僕は鬱に克った！ ザマアミロ!!

そのとき遮断機の警告音が鳴った。僕は怖くなつて早足に踏切を去った。

青空への憧憬

かれはいま目を覚ましカーテンから漏れる光に目を細めた。部屋は漂白されたように無彩色で、また無機質でもあった。かれは自他ともに認めるその怠惰な性格とは裏腹に、中途半端な真面目さもまた持っていたので、部屋は適度に片付いていた——もっとも、かれのその未熟な意志は、かれにとって最大の不幸だったのかもしれない。なにか突き抜けるようなものがあれば、意思は統合され熱を帯びるものだ——反対にかれの場合はばらばらになって、その小さなひとかけらざつが衰微してしまう。

季節は夏を迎えていた。かれはカーテンを開けると、アクリルの絵の具で塗りつぶしたような青々とした空にしばしの間うつつを抜かしていた。そのあと思い出したように窓を引くと、かれはむわっとした空気がかれ自身を包むのを感じた。かれは唐突に口のほうに手をやり、考え込むようなしぐさをした。それはかれがなにかしらの考えを巡らせていることを外部に示すものであり、つまりこれ以上外部から情報が侵入してくるのを拒否するための無意識の意思表明でもあった。無意識のと書いたが、これはかれが、格好をつけるのではなく、ほんとうに無意識で行っていることを意味する。じつのところを言うと、これもまたかれの不幸であった——かれは、例のかれ自身の中途半端な意志の強さによって、かれ自身に対して不道徳を禁じたのだが、これもまたかれ自身の未熟な意志によって、心の底ではおのれの不道徳を寛容してほしいと願った。この二つの相克するテーゼを揚棄するものとして、はたしてかれは不道徳な身体表現を無意識に手に

入れた。かれにとって、かれがかれ自身の不道徳を見えなければ、それはもはや不道徳ではなかった。

さてかれはつかの間の考えを切り上げ、またベッドに戻った。そして寝ころびながら遠く窓のほうを見やり、さらに遠くの景色をぼんやりと眺めた。風はなぎ、じりじりとした光が鮮明な影をつくっていた。かすかに陽炎が揺れていた。依然として空は青かった。

かれは中学のころに図書館の自習室で見た小さな青空を思い出していた。

中学にかれの友人はいなかった。かれはほんらい努力家であったから勉強ができた——あるいはその気質が人を遠ざけたともいえる。かれの家は決して裕福ではなかったが文化的だった。そのため幼少のかれには図書館は身近なものだった。家でクーラーを使うのを控えるよう言いつけられていたかれは、夏休みには一人で自転車をこぎだし、数十分かけて図書館へ向かった。かれには勉強のできる高校に受かるという目標があった。地方の公立中学に通っていたかれには、閉塞したコミュニティから抜け出したいという思いがあった。

なにより、図書館はクーラーが効いていた。かれは自転車での道程をへてほてった身体をそこで冷ました。汗で肌に張り付いた服が冷たく感じられた。かれはしばらくそれを味わったあと、司書に自習室の使用許可を取るのだった。

自習室は図書館の余剰でつくったかのように、いびつなかたちをしていて、せまかった。田舎であるからそれで需要はまにあった——事実、かれのほかに自習室をつかう人はほとんどいなかった。自習室には上のほうに小さな窓があるばかりだった。そのため部屋は採光がたらず始終うす暗かった。

かれは決まってだれよりも最初に部屋に入ったため、クーラーのスイッチをまず入れた。それと同時に、静かだった部屋に、かすかなクーラーの稼働音が響いた。かれはたまに、かれの勉強道具を試みにばさりと音を立てて置いた。図書館という公的空間において、その私的なふるまいは背徳感を覚えさせるものだった。しかし、当然ながら、だれからも咎められないのだった。ただかれの小さな暴力性が、そのいびつで小さな部屋に響くだけだった。

かれは電気をつけることを好まなかった。薄暗い空気がかれ自身の性にあうことを自覚していた。あるいは明るい部屋から見るよりも、暗い部屋から見るほうが窓の外の青空は鮮やかだった。かれは自習室の事務用のいすに座り、事務用のつくえに頬杖を突きながら、勉強の合間に、その無彩色で無機質な空間から、明瞭な空を見上げるのを好んだ。

部屋はいよいよむせ返るような暑さになった。かれはぐったりとした様子で、起き上がる気配を一向に見せなかった。図書館の静謐な空間の想像から帰ってきたかれは、蝉の声がやたらとうるさいのを感じた。

かれは一連の過去を感傷的に思い出した。そしてそれを、いつものように、自身の怠惰さの言い訳にした。クーラーを自由につかえる家庭に生まれた子供と自分とを比較して、自分が前者であったならば、今のように怠惰を愛する性格になっただろうかと想像

した。薄暗がりや無彩色、無機質をまとう人間になっただろうかと問うた。その先の答えはかれの心底では決まっていたが、決して意識の俎上に載せることはしなかった。そしてかれはただ目をつぶり、ふたたび惰眠をむさぼった。

タートルネックさん / 笠原ざわ

タートルネックさん /笠原ざわ

タートルネックさん

頭上に広がる空は秋特有の高さを誇っている。青の中にいくつも浮かぶ白雲から視線を下ろし、俺は隔週で足を運んでいる公園へと急いだ。

土曜日の朝で、集合時刻までまだ十分近くあるというのに公園の一角にはウォーキンググループの面々が続々と集まっていた。年代も性別もバラバラな——しいて言うなら大学生と二十代、五十代以上であろう人が多い気がする——彼らは、穏やかな空気の中で顔見知りや仲間と歓談している。そんな人々から少し距離を取り、スポーツキャップを深くかぶり直した。

このグループには俺と同じ大学の学生も参加しているが、彼らとは並んで歩く事どころか言葉を交わす事すら少ない。賑やかな人付き合いが不得意というのもあって、仲良しこよしで歩くのはあまり好きではないのだ。ならば何故グループ活動に参加しているのかと時々問われるが、俺としては楽に歩きたいからの一言に尽きる。

同じ景色だと飽きるから色んなルートを歩きたい。出来れば自分の知らないルートがいい。グループに参加すれば自分で時間配分を考えなくていいから楽だし助かる。そんな身も蓋もない理由を包み隠さず伝えても笑って受け入れるあたり、このグループは懐が広い人が多いと思う。

そんな事を考えながら定刻を待っていると近くの時計台が時報を鳴らす。それを合図に一同の視線が前方へと集まる。全員が揃ったのを確認すると、リーダーの掛け声とともに軽いストレッチが始まった。

俺は人だまりの後方に位置取って、暇つぶしも兼ねて知り合いや目立つ人物を探し始める。このグループに限った話ではないが、特徴的な髪形の人や決まったものを身に付ける人は割と印象に残るものだ。付け加えると、俺は印象的な人に対しラベルやタグのようにあだ名を付ける癖がある。セブンスターを吸っている友人はナナホシといった具合だ。

いつものように中央寄りの場所で他の大学生と喋っているナナホシを遠目に捉える。他の知り合いも何人か見つけた後、ふと集団の端にいるタートルネックさんに視線を向けた。

恐らく社会人であろう彼女の事を、俺は胸中でタートルネックさんと呼んでいる。名字は確か加藤さんだったと思う。下の名前は忘れた。そもそもフルネームを聞いたかど

うかさえ怪しい。数えるほどしか話した事がないが、よくタートルネックを着ているから顔と名字を覚えたようなものだ。

今は九月末とはいまだ残暑が尾を引く時期だ。誰もがTシャツや半袖の運動着など涼しくて動きやすい服装をしている中、彼女は今日もタートルネックを着ている。俺の記憶が正しければ、確かに夏場も薄手のそれを着ていたような。

何故彼女はタートルネックを着るのか。ストレッチをしている間は暇な脳みそが適当な考察を始めようとしたその時だった。

「置いてくぞ細川あ！」

遠くからナナホシの大声が飛んでくる。奴の言葉で意識を眼前に戻せば、ストレッチはとっくに終わっていたようで皆各自のペースで歩き始めていた。おう、とだけ返して足を動かす。残暑を乗せた風が襟元や足首を通り抜けていった。

舗装された道の上をのんびりと、でも集団からはぐれない程度の速度で歩く。時々落ちている街路樹の葉を何とはなしに踏むと、乾いた音が小さく聞こえた。

今の所、周囲の景色に目新しさはない。余計な事を考える余裕が生まれた脳みそは、先ほどナナホシの大声で中断した考察を再開した。

何故彼女はタートルネックを着るのか。単なる好みという答えが真っ先に浮かぶが、そこで結論付けるのはつまらないからと頭の片隅に追いやった。

首元に何かがある可能性をあげてみる。例えば昔の傷痕とか、若気の至りで彫った入れ墨とか。恋人がいるならキスの跡でも隠しているのかもしれない。

首元の何かを隠すためではなく、首を出さない事に意味があるではないか、という発想も脳裏に浮かぶ。極端に肌が弱くて、日焼けすると火傷のように皮膚が爛れる体质なのかもしれない。何故首元だけを隠すのかは分からぬが、可能性としては捨てきれないだろう。

手足は動かしつつも半ば妄想に近い想像をしていると、例のタートルネックさんがすぐ横をゆっくりと通っていく。その顔色は悪い。元々血色がいい印象は無いが、今日は一層血色が悪く見えた。

「具合悪いんですか」

気になってしまい声をかけると彼女は肩を震わせながらこちらを向いた。その青白い顔には分かりやすく驚きの表情が浮かんでいる。

「顔色悪いんですけど」

「大丈夫、です。すみません」

喉元を押さえながら彼女は顔をそらす。

一線を引かれた。ならこれ以上は踏み込まない方がいい。そう判断して、無理しないでくださいとだけ言ってその場を離れた。

時間を置けば置くほど彼女の反応は妙に気になるものに思えた。あれは拒絶、いや怯えの方が正確だろうか、そんな態度だった。だが今までに彼女に対し怖がらせるような事をしたつもりはない。思い当たる節も特には無い。

男が怖いとかだろうか。もしくは恋人からDVを受けている、とか。加藤さんに恋人

がいるかは知らないが、そんな予想が不意に脳裏をよぎる。隠している首元にあるのは殴られたり絞められたりした跡かもしれない、と。

俺は彼女がタートルネックを着ている理由を知らない。もしかしたら単なる服の好みという問題では済まないのかもしれない。そんな予感に駆られ、自然と歩幅が広くなっていた。

歩調を速めて前方にいる大学生の集団を、その中にいるはずの友人の姿を探す。その最中、彼らは前触れもなくランニング並みの速さで駆け出した。彼らの速度に気圧されて速度を落とした俺と、同じく歩調を緩めたもう一つの人影が自然と横並びになる。その人影は幸運にも、俺が探していた友人だった。

「追いかけなくていいのか」

「息が苦しくなるから走りませーん」

何でもないよう呼吸苦をほのめかす喫煙者を肘で小突く。暴力反対、と作った声で訴えながらも奴は視線をこちらへと向ける。

「で？ 何かあったのか？」

ウォーキング中にこっち来るなんて珍しいじゃん。あごの汗を手の甲で拭いながら、ナナホシは人の良い笑みで促した。

「加藤さんって知ってるか。いつもタートルネック着てる人」

そう切り出せば、ナナホシは鳩が豆鉄砲を食ったような顔をする。

「知ってるけど、あの人がどうかしたか？」

「恋人がいるのか気になってな」

「そうかあ、細川もやっと異性を気にするようになったか」

保護者のような目線でしみじみとコメントするナナホシをもう一度小突く。で？ と返答を急かせば奴はにやつきながらも口を開いた。

「いないって前言ってた。狙ってるのか？ 応援するぜ」

誤解を解くのも面倒で黙り込む。隣から伸びてくる手も無視していると、ナナホシはそのまま俺のキャップのつばを掴み思い切り下げてきた。一瞬背筋がヒヤリとする。恐る恐る奴の表情を伺えば、大方沈黙を都合よく解釈したのだろう、いい笑顔を浮かべている。どうやら奴には気付かれていないようだ。安堵の息を呑み込みつつそのご機嫌な面を睨んでも奴は意にも介さず、それどころか脇腹を小突き返してきた。

「あの人一人暮らしだってよ。帰り送っていいんじゃね？」

最近の夜道は男女関係なしに危険だからな、とナナホシが続ける。熊でも出たのか。そう聞けば、流石にこの辺は出ないわと冷静に返された。

「細川、動く死体って知ってるか？」

「名前だけは。詳細は知らん」

「マジかよ最近話題だぜ？ 語りがいがあるからいいけどよ」

ナナホシは足を止めずに、人間そっくりの見た目で社会に紛れ込んでいるらしいそれらについて熱く語り始めた。

曰く、動く死体は体のどこかに大きな縫い目がある以外は人間とほぼ変わらない見た

目をしているのだと。目撃情報の内容や位置から一体ではない事が分かっているがその行動目的は不明。何故作られたのか、誰が作ったのかも分からぬ。ただ、目撃情報の多くが夜道であった事から夜行性もしくは夜に何かしら目的があるのではないか、とまことしやかにささやかれているらしい。

「先週隣町で見つかった変死体もそれなんじゃね、って噂だぜ」

「物騒な噂だな」

「お前も気を付けろよな。俺ら男でも化け物相手じゃ流石に敵わねーだろ」

「そうだな、と相づちを打ったきり会話は途切れる。徐々に離れていく距離に俺もナナホシも言及しない。この距離感や関わり方を許してくれる奴だから今まで友人関係が続いているのだろう、と今更ながら痛感した。」

遠のいていく背中をぼんやりと眺めつつ、加藤さんに恋人はいないという話を思い返す。DVの線が消えて安心した反面、何故先ほどタートルネックさんが怯えていたのかが余計に分からなくなる。

そもそも彼女は何故タートルネックを着ているのだろう、と当初の疑問に帰着する。だからそこで一旦考えるのを止めた。

季節は冬に差し掛かり、厚い雲に覆われた空の下で公園に集まる人々の中にも厚着姿が増えてきた。俺も先日スポーツキャップを片付けてニット帽に変えたところだ。おかげで耳元まで温かい。

帽子の落ち着く位置を探して微調整しつつ今日も知り合いの顔を探す。ウインドブレーカーを着ているナナホシの向こう、遠目に見えた加藤さんの首元にはいつものタートルネックに加えてネックウォーマーも存在した。二重に隠された首のさらに上へと視線をすらす。顔色はやはり優れない。最近はそれでもマシだった分、その青白さが目立つて見えた。

具合が悪いなら休めばいいのに。そう思いつつも、特に声をかけずに本日のルートを歩き終える。最後尾の集団と共に到着した解散地点に彼女の姿は無かった。

さっさと帰ったっぽいぜ、と隣に来たナナホシが言う。彼女の顔色が悪かった事を発前に伝えたらそれとなく様子を伺ってくれたようだ。感謝を伝えるといい笑顔を向けられた。先日の誤解はまだ解けていないらしい。

ナナホシと別れた後、何となく立ち寄った自販機近くに加藤さんはいた。一応挨拶くらいはするかと思ったところで何やら様子がおかしい事に気付く。彼女は片手をこめかみに、反対の手を喉元に当てた姿勢から動く気配がないのだ。対応を迷っている間に、彼女は崩れるようにその場にしゃがみ込んだ。

中腰になり名前を呼べば、加藤さんは膝を抱えたまま身をこわばらせた。少しの間を空けて、すみません大丈夫ですと小さな声が返ってくる。詰めていた息を吐き出す。どうやら意識はあるようだ。とは言え大丈夫ではないのは見て分かる。

「具合悪いんですよね」

「大丈夫です。痛くはないので」

「でも座って休んだ方がいいです」

すぐ近くのベンチへと促すと、彼女はふらつきながらも自力で立ち上がった。

のろのろと移動する彼女を見ていると、顔を覗き込む必要があるくらい身長差があるのだと不意に気付く。俺の感覚だと大男や熊と対面しているようなものだろうか。そう考えると今まで彼女が怯えたり身をこわばらせたりしていたのも納得がいった。

彼女が腰を下ろしたのを目視してから距離を取る。他人を、しかも体調不良の人間をこれ以上怖がらせる趣味はない。

「無理しないでくださいね。じゃあ俺行くんで」

さっさとその場を離れようとするが、あの、と小さな声で呼びかけられて俺の足は踏み止まった。

「見ましたか？」

「何をですか」

素直にそう返せば、彼女はやらかしたと言わんばかりの表情を浮かべる。そして先ほどからずっと押さえていた喉元の布地をきゅっと掴んだ。

「あの、今の聞かなかつたことに」

「出来ないです」

タートルネックに関する疑問が解消するいい機会かもしれない。悪い考えを胸にそう返せば、ああ、と加藤さんは力なく声をもらした。

一言断りを入れてから、彼女との間に一人分空けて座る。そのまま彼女が口を開くのをじっと待つ。数回の深呼吸の後、彼女はぽつぽつと話し始めた。

「首のところ、見られたくないものがあるんです」

それが見苦しいものだから首元が出ない服ばかり着ているのだ、と。彼女の話を要約するとそのような内容だった。俯いたまま両手でタオルを握りながら話すその姿は不思議と懺悔をしているようにも見えた。

「細川さん背が高いから、さっき上から見えたのかなと思って」

「結果自分から墓穴掘ったと」

「お恥ずかしいことに」

落ち着かないのか、加藤さんは話しながらもタオルを開いてはたたむ動作を繰り返している。隣に座る彼女の挙動に、未だ悪いままの顔色に、今更ながら少しだけ罪悪感を覚える。

「なんか、無理に聞いてすみません」

「いいんですよ。私も楽になりたかったのかもです」

「楽に？」

疑問で返すと、加藤さんは頷きで答える。

「一人はつらいですから」

はあ、と白い息と共に曖昧な相づちを打つ。単にひとりぼっちが辛いのか、それとも一人で秘密を抱えている事が辛いのか。ベンチに背中を預けたまま彼女の言葉の真意を考えていると、不意に細川さんと呼ばれた。俺が返事をするよりも先に彼女は続きを口にする。

「動く死体って信じますか」

世間話や冗談には聞こえないトーンでそう言うと、加藤さんは手早くネックウォーマーを外す。そして襟元が伸びるのも構わずに喉元をさらした。

見てはいけない。湧き上がった本能的な恐怖に突き動かされて視線をそらす。そらそうとした。だがそれは視界に飛び込んできたものによって叶わなかった。

俺の視線は彼女の首元に、首の付け根をぐるりと走る縫合痕に吸い寄せられ固定される。彼女の体にある大きな縫い目と、彼女の口から発せられた動く死体という単語。この二つから導き出される結論を前にして閉じていた口が自然と開く。

なんで、と思わずもれた声に彼女は肩を震わせる。決心するように深呼吸を一つして、彼女はもう一度俺の名前を呼んだ。

「仲間になってくれませんか？」

一息で言い切った彼女は涙を我慢するような下手くそな笑顔をしている。その切実なまなざしから逃げるように手で口元を隠す。その下で、先ほどからずっと開きっぱなしだった口が喜びに歪んだ。

「奇遇ですね」

誰かの前で帽子を外すのはいつ以来だろうか。連日額に押し付けられてばかりの前髪にはもう癖がついてしまっている。ニット帽を持つのとは逆の手で前髪をかき上げると、加藤さんは目を見開いた。

「俺も今同じこと思いました」

あとがき

タートルネックっていいよね。

夢か現か幻か /佐久間佳雪

夢か現か幻か /佐久間佳雪

夢か現か幻か

佐久間 佳雪

尖った石ころが足裏に刺さっていた。小さいのに地味に痛い。イラッとして電柱に手を付き払い落とす。ふと電灯の下で見てみると、今日のためにおろした真新しいストッキングは穴が開いて伝線していたり毛羽立ったりしてボロボロになっていた。もったいないなとは思うけど、今このパンプスを履いてまっすぐ歩ける自信はない。

というわけで指先にひっかけた用済みパンプスは無意味に揺れる。店先で見たときはあんなにぴかぴか光って私にアピールしていたくせに、今日一日履いていただけでずいぶん薄汚れたようだ。根性なしめ。それなりに高い買い物だったけれど、きっと二度と表へ出て来ることはない。

寂れた住宅街のアスファルトでのこぼことした歪な感触を直に足裏で感じながら、ふらふらと家路を辿る。質の悪い足つぼマッサージみたい。じんわり暖かいような気がするのは、昼の日差しのおかげなのだろうか。

今朝から体調も気分も優れてはいなかったが、今はもう心身ともに限界の縁を歩くような状態だった。足は痛いし、汗でべたつくし、普段しないメイクは不愉快。なにもかも取り去りたくて、痛む足を引きずりとにかくアパートを目指した。

なんとかたどり着いた最後の閑門、さびた鉄の外階段を鉛のように重い足でのろのろと上がっていく。冷えた鉄板は疲れて熱を持つ足には心地がよかった。

「——やあっと帰ってきた」

予期せぬ人の声に驚いて顔をあげた先で、シワひとつないセーラー服に身を包んだ彼女がつまらなそうに立っていた。天使の輪をそなえた黒髪を風に揺らし、目尻のあがった大きな目で私を見下ろす姿は一枚の絵画のよう。今日も相変わらず美人だなあ、とぼんやり見上げていると彼女はさらに不機嫌な表情になって私の手を掴んだ。

「遅すぎ。てかなんで靴履いてないの？」

「あ、足が、疲れたから」

「はあ？ だからって普通脱ぐ？」

そう言って彼女——高槻すすきは、呆れたように笑った。

「どうしたの、こんな時間に」

「ママが彼氏に呼ばれて出てったの。だからおねーさんとこ泊めてもらおうかなーって思って。いいよね？」

「ああ……うん」

すすきは隣の部屋に母親と二人で暮らしている。母親には会ったことはないけど、彼女いわく「かなりの放任主義」らしい。夜遅くに高校生の娘を一人置いて出ていくあたり、そんな感じはする。

思えばすすきに出会った日もそうだった。あのとき鍵を持っていなかったすすきは寒空の下部屋の前でうずくまっていた。そこに出くわした私はそのかわいそうな姿を見ていられなくて一晩泊めてあげたのだ。それからすすきは時々こうして私の部屋を訪れている。

何も入らないような小さなバッグから鍵を取り出し、部屋の中に入る。その瞬間、ぷつりと何かが切れた。そしてまったく抗うこともできずに私は玄関で膝から崩れ落ち、惨めに床に這いつくばる。自分でも驚いて、え、と声が出た。次の瞬間には視界がぐんにやりと歪み、みぞおちのあたりから吐き気がせり上がる。あ、やばい。嫌な汗が吹き出している。

ちょっと、と焦ったような声がして、すすきは私の二の腕を掴んだ。引っ張られても全然足に力が入らず立てやしない。ばたん、とうしろでドアが閉まる音がした。

「もー、ここまで来たんだからベッドまで頑張ってよ……ほら、立って」

「むり、きもちわるい……」

「はあー？ 飲みすぎだよ、ばか」

「や……いってきも、のんでない……」

「え、じゃあ普通に体調不良？ えーっと、と、とりあえずベッド行こ、肩貸すから」

「ふふ、やさしーね……」

「笑う元気があるならちゃんと立ってよ！」

「んふふ、むり……う、はきそう……」

「うそ、と、トイレまではガマンして！」

ぐっと持ち上げられ、半分引きずられるようにトイレに連れていかれる。すすきの細腕のどこからこんな力がでているのだろう。これが火事場の馬鹿力ってやつか。そんなことを考えているうちに口の中が酸っぱくなってきた。トイレに顔を突っ込んで、いつ戻してもいいような体勢をとる……が、一向に出てくる気配がない。なんで、こんなに気持ち悪いのに。もうすぐそこまできてる気がするのに。

「あたし外いるから、終わったら……」

「まっ、て……はきかた、わかんない……」

気を使って出て行こうとするすすきのスカートを慌てて掴み、引き止める。辛くて、助けて欲しくて、ぼろりと涙が溢れた。

少しの間。衣擦れとため息のあと、ひどく優しく背中を撫でられる。

「……わかった、手伝ったげる」

すすきの細腕が背後からにゅっと伸びてきて、白い指が私の口を強引に割り開く。囁まないでね、って穏やかな声が耳のすぐそばで聴こえて、肌が粟立つ。理解が追いつかないまま無意識に侵入を阻もうとする舌を押さえられ、ぬるりと入り込んだ指先は私の喉の奥を優しく押した。

「おえ、っ」

出すもの出していくらかすっきりしたもののがけなしの体力がごっそり削れてしまい、壁にもたれかかったまま指一本動かせない。あと十も年下の子に泣きついた拳句ゲロ吐く手伝いをしてもらったという事実が私のメンタルをごりごりえぐっていた。

情けないやら恥ずかしいやら涙が滲む。年上の威厳なんてものは端からなかったけれど、私にも一応プライドというものがある。まあ、吹けば飛ぶような粗末なものだけれども。

「はい、お水。気持ち悪いでしょ、口ゆすいで」

「ごめん……」

「慣れてるから」

ろくに力の入らない手でコップを受け取って口をゆすぐと、酸っぱいような苦いような不快感が少し和らぐ。残った水は全部飲んで、ようやく気分がマシになってきた。

壁を使ってよろよろと立ち上がり、ゾンビみたいな歩きでベッドへ。倒れこもうとしたらすすきに止められた。

「待って、寝るならドレス脱いで」

「はあい……」

手慣れているなあと思いつつ背中へ手を伸ばそうとする前に、すすきが躊躇なく後ろのチャックを下ろす。ありがたい。くすみブルーのパーティードレスを床に脱ぎ捨てて、私はベッドへダイブ。下着姿では風邪を引きそだと一瞬思いはするがおうちのベッドの魅力には抗えない。気持ちいい、最高。吐いたおかげで具合も少しは良くなったり、足も自重から解放されてかなり楽だ。

すすきのため息をよそにもぞもぞと楽な体勢を求めて仰向けになる。ベッドに全身が沈み込んでいくような感覚に、ふっと睡魔が顔を覗かせた。このまま寝てしまおうかと目を閉じれば、今日のことが脳裏をよぎる。思いつくまま、口を開いた。

「……今日ね、親友の結婚式だったの」

すすきはドレスをハンガーにかける手を一瞬止め、へえ、と薄い返事をした。半分寝言、半分独り言のつもりだから言葉を続ける。

「すごく綺麗だったんだよ。レースいっぱいのドレスもユリのブーケもほんと似合つてて。笑う顔も、泣いた顔も全部、全部、綺麗で……」

目を閉じて、思い浮かべる。チャペルを包み込む柔らかな光と、幸せの純白。笑顔と祝福のなか、愛を誓う彼女はまばゆいほどに美しい。きっと今日は彼女にとって人生最高の日だった。

同時に思い出すのは、それを素直に祝えない私。嬉しそうに微笑むふたりに拍手を送りながら、長い初恋の終わりを悲しみ、諦めきれない恋心を押し殺すので精一杯だった。

私はきっと世界で一番、彼女を愛していた。多分、新郎よりもうんと想いは長く、深い。でもそれももう終わりにしなければならない。あの子に彼氏ができてもプロポーズされたって報告されても、まだ未練がましく続いていた恋を本当に諦めるときがきてしまったのだ。

じわ、と涙が滲む。一度泣いたせいで涙腺がばかになってしまったみたいで、止める気も失せるくらい次から次へと溢れ出していく。腕で目元を抑えても、涙も思いも止ま

らない。

「ずっと、好きだったんだけどなあ……」

どれだけ好きでいたって私は女で、あの子も女で、たったそれだけのことで私は隣にいる資格がない。こんなにも理不尽なことってあるのだろうか。長く、深く、一途に想つた人が報われる世界だったらどんなによかったか。でも現実はそんなに優しくできていないから、今私は一人ぼっちで泣いている。

式の間ずっと、わがままで聞き分けの悪い私が、どうして私じゃないのと騒ぎ立てていた。幸せになってねとあの子が笑ったとき、酷い言葉が口をついて出そうになった。あのときの私は、いや、今日の私は、ずっと最低で最悪の女だ。

ふと影が差して腕をどこしてみると、すすきはベッドに上がっていて、その指が下着のウエストゴムにかかっているように見えてぎょっとする。一気に眠気が吹き飛んで改めて見ればストッキングを脱がそうとしているだけだったのだが、びっくりして涙は引っ込んでしまった。

「腰、浮かして」

大人しく従えばストッキングは蛇の脱皮みたいに剥がされ、そのままごみ箱行き。今更ながらもったいないことをしたなと思った。本当に今更。無駄になった英世はもう戻つてこない。

すり、とすすきの手が私の足に触れる。まさかそんなことするとは思わなかつたのと意外と冷たかったのとで、大げさに体が跳ねてしまった。恥ずかしい。しかし私の反応など気にもとめず、すすきの細くて白い指は太ももから膝、ふくらはぎを通つてくるぶしをなぞり、足の裏へ。確認するようにさすって、ふと、動きを止めた。

「すすき……？」

様子がおかしい。身を起こして名前を呼んでみてもすすきは視線を落としたままだ。それにしても綺麗でもない足をそんなにまじまじ見つめないでほしい。どうにも居心地が悪くって、足を引っ込んで薄い肩に触れると、長い睫毛が震えた。やがてすすきはゆっくりと顔を上げ、少し潤んだ目で私を見上げる。その表情はあの子とよく似ていて、どきりとした。

「あたしよりも？」

なんのことだかわからなくて思考が一瞬止まった。その隙にぐっと距離を詰められ、ついでに息も止まる。今までにないくらい顔が近い。うわ、めっちゃ肌綺麗。目がきらきらしてる。すごいな、若いな。そんなどうでもいいことばっかりが頭に浮かんだ。

「あたしよりも、きれいだったの」

しごれを切らしたのか、さっきよりも強い口調で再び聞かれた。それでやっと理解して、どうしようもないくらいの愛おしさがこみ上げる。この子、拗ねているんだ。私なんかの何気ない言葉で一喜一憂してしまうくらい、私のこと好きでいてくれているって思つていいのだろうか。

何も言わずにいたら、すすきは不安そうに私の手首を強く握る。ねえ、と頼りない声に急かされて、彼女の頬を撫でた。思えば私から触れたのはこれが初めてだった。

「ううん、すすきが一番」

ふ、と表情が緩む。初めて見た柔らかい微笑みのあとで、すすきは内緒話をするように声をひそめた。

「じゃあ、誓って」

誓ってって何を、と聞く前に、すすきは足元の方でくちやくちやになっていたガーゼケットを広げ頭から被る。どうやら白いガーゼはヴェールの代わりらしい。

きゅっと引き結ばれていた唇が少し開き、もともと近かった距離がさらに縮まる。頭の片隅に一瞬顔を出した理性は見て見ぬ振りをして、押し当てられる薄桃を受け入れた。

終

都市の帰結 /汐咲ひかり

都市の帰結 /汐咲ひかり

都市の帰結

汐咲ひかり

どうかこっちへ来ないで。

私は必死になって手元のノートに目を向けて、念じた。教室の喧騒の中で、彼一人が
私に声をかけてきても目立つことはないだろうし、話す内容は事務連絡だ。

でも、来ないでほしかった。

そんな懸念すらも無くなり、一秒でも早く平凡な日常に戻りたかった。

「なあノート見せてよ」

そっと顔を上げると、彼は私の一つ前の席の男子に声をかけていた。私は深く安堵して、今度こそじっくりと自習に取り掛かる。彼らは楽しそうに喋っている。その声を聴きながら、今日も優しい日常を取り戻せたのだと、窓からの風を心地よく感じた。

友達と恋愛関係の話をしたとき、私は彼女らの話を楽しく聞いていた。ファミレスで大盛りのパフェがやってきてひとしきり写真を撮り、いざ食べるときになると恋愛の話で持ち切りになった。パフェを食べる手は止まり、随分と夢中になって語る。好きな人と急接近した話や、恋人とデートに行った話、恋人への不満愚痴、過去の恋愛の話。私は好きなパフェを食べながら終始聞き、いつの間にかパフェを食べ終わっていた。正直手持ち無沙汰だったもののそれはそれで楽しかった。彼女らの現実味のない話は、テレビの向こうのドラマのようで聞いていて面白かったし、ご飯のお供にはちょうど良かつた。私はメニューの目についたものを注文しようと店員さんを呼び、ほっと一息紅茶でもすすろうとした時だった。

「そういえば、街瑠は？　好きな人いないの？」

ご注文承ります、とやって来た店員さんの言葉に反応できなかった。

「え、もう大丈夫ですーありがとうございますーお冷くださいー」

急に真顔になったのを自分でも感じた。友人は半ば強要して聞いてくる。私は必死で考えたが、何も思い浮かばず、その場を流そうとした。

「街瑠の好きな人は、結都でしょ」

すすっていた紅茶を盛大に噴き出した。

「あーあー」

友人たちがテーブルを拭いてくれたが、私は固まっていた。その名前が出てきて動搖し

たどころか、自分がその話題に動搖していることが驚きだった。気づくと、彼女らは全然違う話題で盛り上がっていた。ファミレス内は陽気なBGMがかかり、彼女らの喋り声は他の客の声と調和していた。私はすぐに立ち去りたかった。

加賀結都、と検索すると、「加賀市」がヒットした。彼の情報が出てくるわけがないと思って、不意に画像検索すると四、五番目ぐらいに彼の写真が出てきた。地元のサッカーのクラブチームの集合写真だ。画像の載っているサイトに移動すると、地元新聞の記事で県内優勝を報じていた。優秀選手として彼の名前が載っている。

いったい何をしているのだろうと、すぐにサイトを閉じた。私の名前を検索しても絶対に出てこない。むしろSNSのアカウント名の方が出てくる。彼のSNSは何だろうとまた、検索エンジンを開こうとしたが、阿呆らしくてすぐにやめた。

私は彼に比べたら何もないし、別にそれでもよかった。私と彼は確実に違う人間であることは一目瞭然だったからこそ、彼とは違う人間として、何もない自分に満足していた。住む世界も違うし、たとえその世界が近かったとしても、知らない人としてすれ違って自分の世界に戻ることが、私の中の平穀だった。これからも平穀なはずなのだ。なぜだろう。これからも平穀なのだと言い聞かせている自分がいた。

日曜日になり、友人のさとみと都内の繁華街に遊びに行った。その日は非常に暑くて、灼熱のコンクリートの上を歩くには、私達はすぐにギブアップしてカフェに入った。カフェは涼しすぎるぐらい、冷房が効いていた。私がホットラテを頼んでいるところを見て、さとみは、そういうところだよ、って言った。

「ところで、この前の話ほんとだったんだね」

私は温かいコップを恐る恐る口に近づけた。さすがにもう噴き出さなかった。でも、やはり何も説明できなかった。言葉が出てこなかった。

「好きって認めたくないんでしょ。街瑠を束縛しているものなんて、何もないのに」

彼女は随分と私のことを見透かしていた。さすが十年來の幼馴染だ。

その通りだ。住む世界は決して違う訳じゃない。容姿だって、スキルだって、きっと仲良くなれば気にならなくなる。なんなら彼とうまくやっていけそうな気がする。聞き手の私とちょっと饒舌な彼。自意識過剰かもしれないけど、彼が私とおしゃべりして笑顔でいる想像が出来る。

それでも私は彼女と目を合わせることが出来なかった。彼女は頬杖をついて、巻いた髪をポニーテールにして、その長い髪を指でくるくるといじっている。

「結都のこと、取らないでよ」

今日は映画館とゲームセンターとショッピングに行くつもりだったものの、さとみは急用が出来たと先に帰ってしまった。

私は炎天下の駅前でぼーっと立っていた。私はあの彼女のにらみつける瞳が頭に張り付く、それが陽炎となり、今まさに私を焦がそうとしているのではないかと、ゆらゆらと

視点が定まらなかった。

私は今まで好きだとは一度も言ってこなかった。先ほども無言を貫いた。ただそれが良かったとはとても言えないし、何よりばれてしまった時点で何かを大きなものを失ったのは確かだ。それでも私は解放された。これから堂々とクラスメートとして彼と喋れるかもしれない。もしかしたら、今後友達として、好きという気持ちが消えて、遊んだり、笑いあつたりできるかもしれない。拒絶する必要が無くなるし、すれ違った時の緊張を意識しなくなるだろう。

スクランブル交差点の信号が赤から青に変わり、人ごみの中に混じって歩いていく。人の顔すら認識できないほどに、様々な人が行き来して、いったい誰とすれ違ったことすらよく把握できない。

今彼とすれ違ったら、私は気づくことができるだろうか。私よりもずっと彼女なら彼に気づくことが出来るだろう。そうだ住む世界が違うのだ。この場所に彼はいない。それでよかったのだ。そう帰結する私は、自分のことが誇らしかったし、今までの自分がみじめに思えた。

頭がもうろうとする。私は泣いているのか。多分これは泣いているのかもしれない。それすらも確かめたくなかった。寂しい。こんなにも人がいるのに、どうしてこんなにも寂しいのか。私はこの気持ちを今こそ捨てなければならない。こんな自分に別れを告げるのなら、せめてもう一度彼に会いたかった。その時は今度こそ避けずに、彼を追いかけるのだろうか。

「三城さん」

心臓がバクンと、地雷が爆発したような、心臓を強く締め付けた痛みだった。

「加賀くん」

まさに背後に彼が立って、私の腕をつかんでいた。不安げな表情をしていて、思わず目を背けた。

彼の首筋に光る汗が脳裏に焼き付いて、急に周りが鮮明になった。渡り切った交差点と、人ごみからの騒音と、彼の腕をつかむ強さが体に伝わった。

「大丈夫？ フラフラだったよ」

自分の今の姿に恥ずかしさがこみ上げた。腕を離してほしくて、勢いよく振りほどいた。

「だ、大丈夫だよ、ありがとう」

「泣いてたみたいだけど」

顔に手をやると、涙で濡れていた。恥ずかしくて、今すぐに立ち去りたかった。

「三城さん」

「なんで、大丈夫だから」

「つらそうだったから」

その言葉を聞いて、またドキッとした。さっきよりはすごく分かりやすく、でも、それは決して痛みではなかった。

「おもわず引き止めてしまった」

心を締め付けていた紐がほどけていくのを感じた。心がじんわりと温かくなるような、その場で泣き崩れそうになりながらも、私の今までの気持ちが正しかったことを確信し

た。私はそれで十分だった。

彼に目を向けると、すごく心配そうな表情をしていた。そんな顔をしないでと思いながら、私は目を背けずに言った。

「大丈夫だよ」

奥付

奥付

奥付

案山子 2021 夏号

<https://puboo.jp/books/files/132952>

著者：新潟大学文芸部

<https://puboo.jp/users/sindaibungeibu>

電子書籍プラットフォーム：パブー（<https://puboo.jp/>）

運営会社：デザインエッグ株式会社

案山子二〇二一 夏

著 新潟大学文芸部

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
